



再臨のキリストに
よる第二福音書
ヘルメスの杖 上

小錬金術

正道

目次

ヘルメスの杖、上 小錬金術——目次

序 杖を持った神

座標 1 混在的一者

座標 2 教育の初期

座標 3 教育の中期

座標 4 教育の後期

座標 5 自我の確立

分化から総合へ

座標5.1 アルベド侵入の起点

座標 6 アルベド侵入の初期

座標 7 アルベド侵入の中期

座標 8 アルベド侵入の後期

座標8.9 恩寵の原理

恩寵の原理とキリスト教

第一部 混在から分化へ

序 杖を持った神

イエスとヘルメス

第一福音書『テロス』において、私は、二つの宗教的なベクトルを呈示した。神の人間化を意味する「↓」と、人間の神化を意味する「↑」である。

そして「↓」を象徴する存在が、イエス・キリストだとすれば、他方の「↑」を象徴するのは、東洋でならば釈尊、西洋でならば「ヘルメス」である。錬金術は西洋に現れた仏教的思想であり、その錬金術において神とされたのがヘルメスだからだ。

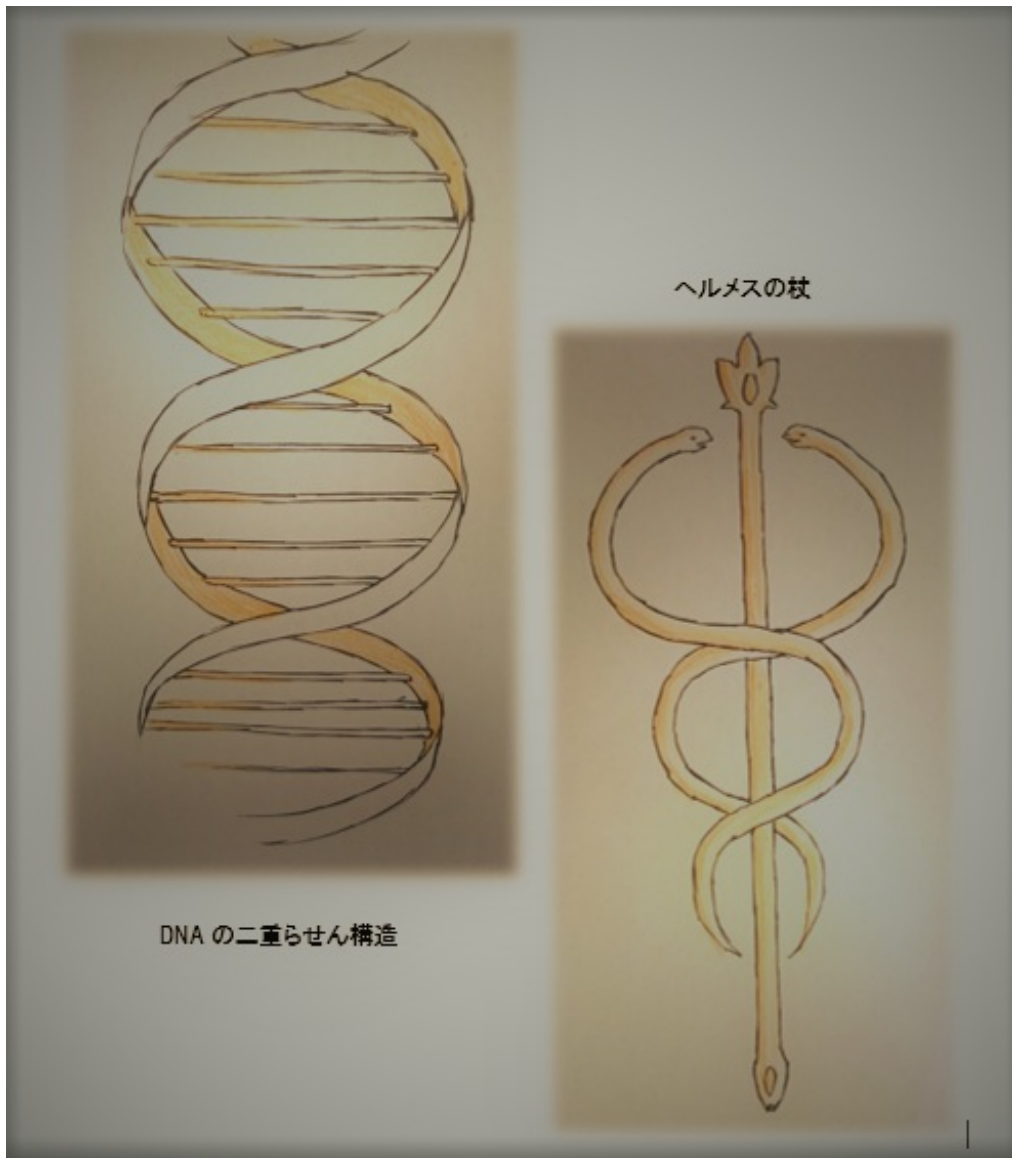
ただし、ここで言うヘルメスは、ギリシア神話における「使者の神ヘルメス」とは少し違う。我らのヘルメスは、古代錬金術の故郷でもある、エジプトの神トートと習合（合体）したヘルメスであり、尊称で呼べば「ヘルメス・トリスメギストス」となる。三倍も偉大なるヘルメスという意味だ。

ヘルメスの杖という曼荼羅

ヘルメス・トリスメギストスは、その手に杖を持っている。その杖は、ケリュウケイオン、カドケウスなどと呼ばれるが、このさい名称などはどうでもいい。そのフォルムの重要性からすれば、そんなものは、ごく些細な話である。

というのも、私はこれから「↑」、換言すれば「人間の神化」の過程を段階論的に示そうとしているのであるが、その内容を図示しようとする、本当にピッタリと、このヘルメスの杖の形に当てはまってしまふからだ。つまりヘルメスの杖は、錬金術的段階論にとって、まさに曼荼羅（悟りの世界観を、視覚的に表した図）にあたる訳である。

そして、それともう一つ、ヘルメスの杖の形を眺めていて思い浮かぶものがある。それは、かのDNAの二重螺旋構造との酷似である。DNAとは、私たち生物にとって、その肉体の設計図とも言えるものだが、そのDNAの形とヘルメスの杖の形が、驚くぐらいそっくりなのである。



人間は聖書を抱えて生まれてくる訳ではないし、密教の曼荼羅を抱いて生まれてくる訳でもない。しかし唯一、ヘルメスの杖に関してだけは、その相似形にあたるものを、DNAとして、細胞の一つ一つに抱えながら生まれてくるのである。

しかも、顕微鏡を使わなければ見られないDNA形状のものを、何千年も前の人たちが、尊いものとして、神さまの持ち物として図案化しているのである。彼らは何によって、その形を知ったのだろうか。もちろん、その答えは出せないが、この不可思議さに、錬金術の「教えとしての根源性」が表れているような気がしてならない。

登坂のエネルギー源

さて、ではこれから、ヘルメスの杖の形をなぞりながら、人間が神に近づきながら変容していく過程を追ってみたい。ヘルメスの杖は、いわば人間の地平と神の視座をつなげる梯子であり、すべての人間は、この梯子を昇っていく。

なぜなら、潜在的には、すべての人間の心のなかに「人間＝神」の達成予定表が刻まれているからだ。これは、仏教における如来蔵思想と同じものである。つまり全ての人間の心には、仏と同質のものがあるのである。グノーシス主義者であるプトレマイオスもまた、それと同じ意味合いのことを言っている。

人は遅かれ早かれ、意識的にせよ無意識的にせよ、ヘルメスの杖という梯子を昇ってゆく。たとえ、ヤコブの夢のように、梯子という全体像は見えなくても、坂を登っていくという感覚ぐらいは、誰しも味わうことになる。

そして、その登坂のエネルギー源は、「彼の意識が、彼本来の心象（人間＝神）と重なり合うまでは、自分のあり方に違和感を覚えて落ちつかない」という理由である。

また「坂を登っているというムーブメント（動き）そのものが、人間本来のあり方である」という捉え方もある。だから坂を登っていないと違和感が出るわけだ。

したがって、停滞や退転といった非本来的な状態にあるときには、彼にはペナルティー（罰則）が課せられる。無意識にひそむ"本来的な彼"が、非本来的な彼の意識を裁く訳だ。

このペナルティーは、さきほど「違和感」と表記したものと同じものを指しているが、実際には違和感などという軽い話では済まないのも、もっと深刻な響きがする「ペナルティー（罰）」のほうが、より正確だろう。

では、ヘルメスの杖という梯子、上り坂を登らないために生じるペナルティーとは何か。それは苦しみであり、ときに神経症であり、他人への責任転嫁によって生まれる軋轢である。いや、煎じ詰めれば、あらゆる悲しみがそこから生まれる、と言っても過言ではないのかもしれない。

小錬金術と大錬金術

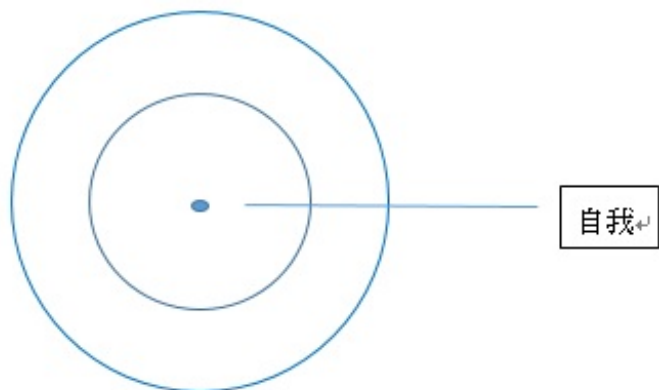
ヘルメスの杖の登坂を、化学的思想の中で教義化したのが錬金術であるが、この錬金術には、目的完遂までに、大きな二つの段階があるという。

一つは銀を獲得するまでの段階で「小錬金術」と呼ばれる。そして二つ目が、銀を変容させて黄金を獲得する段階であり、こちらは「大錬金術」と呼ばれる。

私は物質的な銀も金も読者に提供することは出来ないが、それは古の錬金術師とて同じことだった。錬金術師たちが求めたものは――彼が高尚であればあるほど――「銀のごとき価値ある

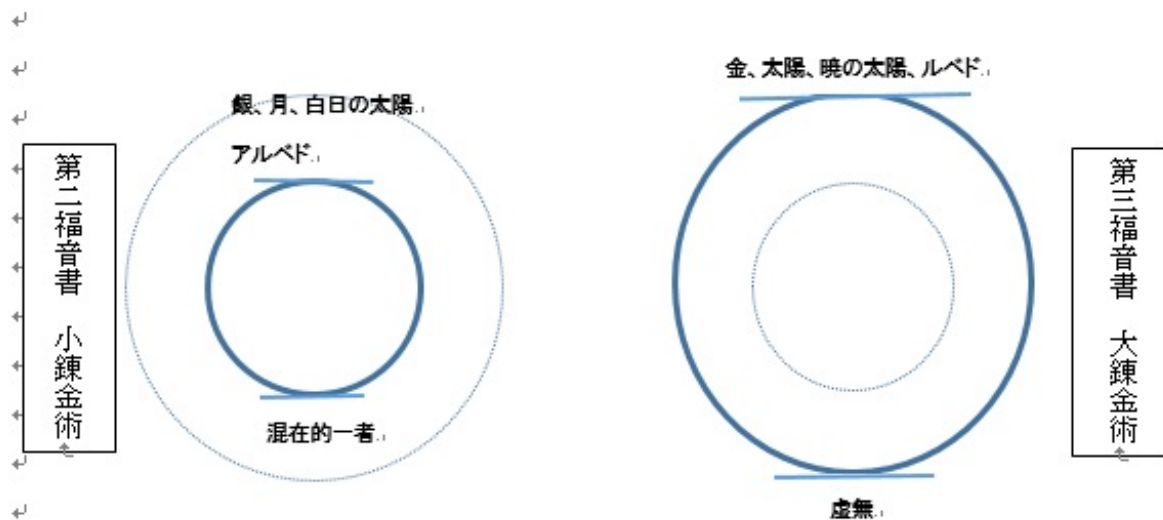
悟り」であり「金のごとき価値ある悟り」だったのだ。

この二つの段階を、私なりに解釈すれば、次のような二重の円で示すことが出来る。円の中心は、人間の自我にあたるが、そこを中心にして同心円が描かれている。



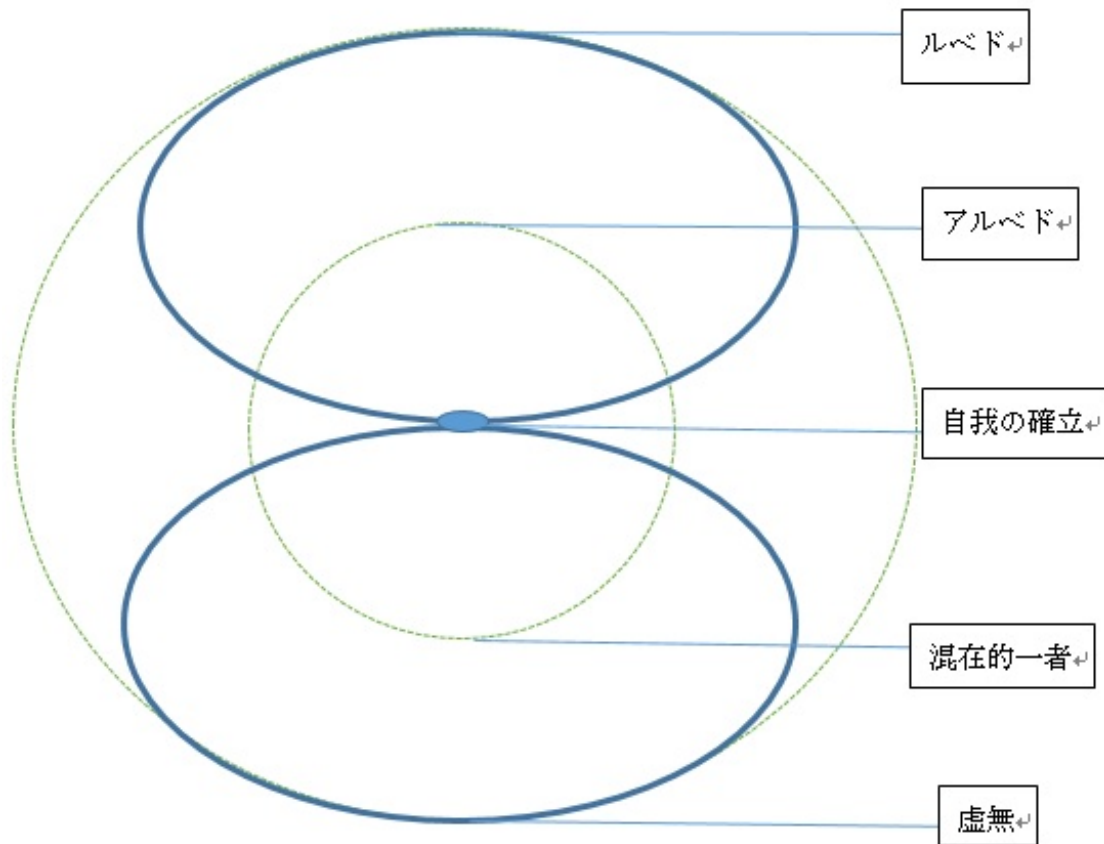
小さなほうの円が小錬金術にあたり、その円周は、後述する「混在的一者」と「アルベド」をつないでいる。アルベドは象徴的に、銀、月、白日の太陽を表している。

それに対して、大きなほうの円は大錬金術にあたり、その円周は、これもまた後述することになる「虚無」と「ルベド」をつないでいる。ルベドは象徴的に、金、太陽、暁の太陽を表している。



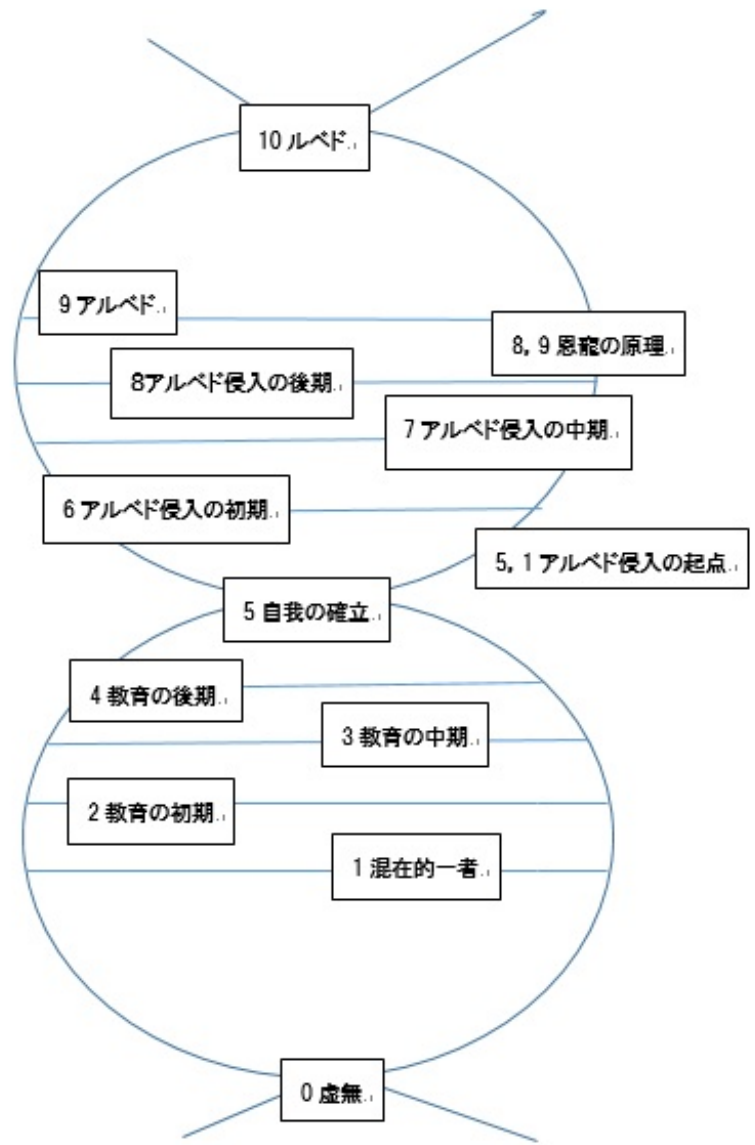
この二つの円に倣い、ヘルメスの杖は、上巻で小錬金術、下巻で大錬金術を扱うことになる。福音書シリーズの通巻で表記すれば、第二福音書（本書）が小錬金術、第三福音書が大錬金術ということだ。

そして、さらに、この二重の円にヘルメスの杖を重ねると、次のような図になるのである。



これが本書の基本設計図である。これから先の論述は、この設計図の注釈だと言ってもいい。それぞれの座標に番号をふったので、読者にとっては、その番号を頼りに、論述的理解と、ヴィジュアル的理解とを交互に深めていってほしい。

座標図



人間の神化のスタート地点

ヘルメスの杖という梯子登り、「人間の神化」の始まりは、人間の肉体的な誕生である。人間が生まれぬことには、その神化も生じようがないからだ。そんなことは当たり前だなどと言ってと馬鹿にすることなかれ。この誕生の場面には、実に大きな神秘が隠されているのだ。端的に言って、この場面はアルペドの雛型なのである。

この誕生の場面を、私は「混在的一者」と呼んでいるが、その呼び名には「何かと何か混ぜ合おうようにくっついているので、ならば、それを一つのものとして扱うのが妥当だろう」という思いが込められている。

化学的な錬金術でも、作業の始まりは、まずカオス（混沌）状態にある物質を手に入れることである。必要な材料を混ぜて熱し、ドロドロのペーストを作ることが、錬金術のスタート地点なのである。

錬金術におけるカオスの材料は、たいがい硫黄と水銀であるが、私の「混在的一者」において混ぜ合っているのは、母親と子供の意識である。そして、特別な指定がないかぎり、読者には、その子供を男の子だと思っていただきたい。つまり「母 - 息子」のペアだ。

また、私は、その男の子のことを「主体」と呼ぶ。主体は、この論述全体の主人公名であり、それは第三福音書の終わりまで続く。

抽象的な名称にふさわしく、ときに自由に、ときに曖昧に「主体」という主語を使うことになるだろうが、基本的には、主体は本章で生まれた男の子であると考えていただきたい。

妊婦

一口に「混在的一者」と言っているが、その内容は、主に二つの要素に分けることができる。もっとも、要素というよりは、二つの場面とか、二つの時期と言ったほうが適切かもしれないが。

まず第一の場面が「妊婦」である。妊婦のなかで「母 - 息子」のペアは、確かに「一つのもの」「一人の人」として成立している。考えてみれば当たり前のことだが、不思議と私たちは、この事実を気をとめない。だが気づいてみれば、その子宮のなかに胎児を収めた母親は、どう見ても、二人でありながら一人なのである。

実際に、妊婦であった時期の妻に向かって、
「ママは、今ひとり？ それとも二人？」

と尋ねたことがある。そのときの答えは「知らない、どっちだろう」だった。つまり、どちらでもないし、どちらでもあるのだろう。

ただし「母 - 息子」のペアが妊婦状態にあるとき、胎児（息子）の人格はまったく成立していない。だから、そんな「妊婦状態の一者性」を図式的に表せば、子供の微弱な人格を、母親の人格が、まるっきり呑み込んでしまっているような形になる。子供の人格は、母親の人格によって、完全に覆われているのだ。

であれば、この場面における一者性とは「母 - 息子」の合一だとしても、その存在感のほとんどは母親のほう担っていることになる。つまり「母も息子も、適材適所によって、同等の存在感を表出している（＝総合）」という訳ではないのだ。

母と息子は、せいぜい"混在"によって一つに結びついているだけである。それだから私は、この段階を「混在的一者」と呼ぶのである。

天と地のシンメトリー

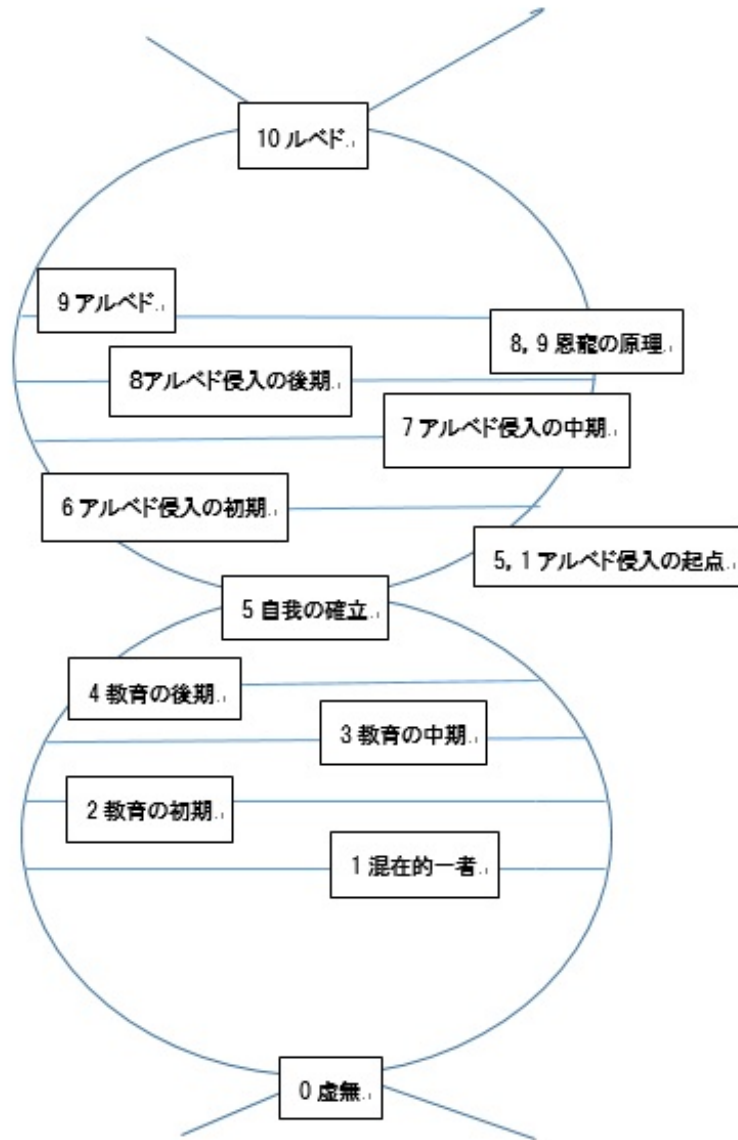
そのように混在に過ぎないとしても、妊婦にあっては、肉体的に、たしかに「自他一体」が実現されている。自分と他人（母と息子）が一つになっている。

そして、それは天なるアルベド（座標9）で実現される、霊的な自他一体の、地なる対応物となっているのだ。アルベドにおいては「全にして一」「無限」という形で、自他一体が実現されることになる。

その詳しい内容については、とうぜん後段に回すが、妊婦とアルベドが、天と地に対応物として配置されている事については、今の段階でも注目しておいてよい。

もっと正確に言えば「自我の確立段階を折り目にして、妊婦とアルベドが、上下にシンメトリーを描いている」ということだ。どうか、いま座標図を見て、その上下対象のフォルムを確かめてほしい。

座標図



そうすれば次の事が分かるだろう。かのヘルメス・トリスメギストスが遺したという、錬金術の根本経典『エメラルド板』には、

「一なるものの奇跡を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上にあるものの如く、上にあるものは下にあるものの如し」

と書かれているが、まさしく、ここに経典どおりのことが行われているという事が。

妊婦の外在化

混在的一者の"第二の場面"は、主体（母親から生まれた息子）が、生後およそ10か月を迎えるまでの期間である。人類学者のアシュレー・モンタギューは、それを「体外妊娠期間」と呼んだが、実に言いえて妙である。

この期間は、妊婦の状態が、体の外側で再現されている状態だと考えてよい。子供は胎内でなく、すでに母親の外側にいるけれども、それを心理的に見れば、両者はいまだに妊婦のごとく一者化している、ということである。

これは、ある意味、きわめて人間的な状態だ。

動物は、生まれるとすぐに四つ足で立ち上がろうとするし、生まれてから一時間もすれば、実際に立ち上がってしまう。それは、天敵からわが身を守るための本能的行動に他ならない。

というのも、肉食動物が、生まれたばかりの草食動物を襲うのは常套手段だし、そうだとしたら、立って走って逃げないかぎり、仔は今日の命でさえ守れないからだ。もちろん肉食動物だって、生まれたばかりの時には、ほかの動物の恰好の餌食になるほど弱いのが、事情としては、草食動物となんら変わらない。

しかし人間だけは事情が異なる。

人間の赤ちゃんは、生まれてすぐに立ち上がろうとなどしないし、四つ足で歩ける（ハイハイ）ようになるまで、およそ10か月の日にちがかかる。

これは人間が社会的存在であり、そのコミュニティ（生活共同体）が、動物的な天敵の脅威から逃れているからこそ成り立つことだろう。もし身近に天敵がいたなら、生後10か月未満の赤ん坊など、即座にその天敵の餌になっているはずだ。

ところが人間の赤ちゃんは、そうした危険などつゆ知らず、平和裏のうちに、この10か月間を、完全なる母親の保護下で過ごす。いわば胎外にあっても「いまだ子宮に包まれているかのような保護感」を味わうのである。なにしろそれは、動物の「生まれてから歩くまでの一時間」を、10か月分に引っぱり伸ばした期間なのだから。

すなわち、生まれたばかりの動物から、まだ羊膜が取れきっていない状態のように、生後10か月未満の赤ん坊は、いわば"生まれきっていない"状態なのだ。それは、胎児であることを、胎外で再現しているようなものに過ぎないのである。

性格をつくる期間

ただし、この頃には――生まれきっていない、赤ん坊であったとしても――主体には、すでに意識の芽生えがあり、母親との一体感を記憶することが出来る。もっとも、その記憶は、フワフワと生まれては消えていく泡沫のようなものであって"思い出"になるほど永続するものではないが。

そう、その期間の思い出の持主は、主に母親であって彼ではない。むしろ、この頃の記憶が作り出すのは、思い出ではなく、彼の"性格"だろう。

この期間の母子一体感に十分な密着度がないと、主体は、自分が存在しているという事実を肯定しづらくなる。なぜなら、主体の存在を支える最初の基盤は「母親から愛された記憶」に他ならないからだ。それだけに、母子一体感において瘦せた記憶しか持っていない主体は、つねに不安と寂しさを抱えているような卑屈な性格をつくることになる。

卑屈とは、自分を守ることにばかり必死で、他人を愛するだけの余裕を持っていない、小さな人間を指す言葉である。心に支えがなくて、すぐに転がってしまいそうなハラハラ感が、他者を顧みる余裕のない、卑しい心象を作りだしているのだと言えよう。

それを鑑みると、前出の人類学者、アシュレー・モンタギューが語った、「人は愛されることによってのみ愛することを学ぶ」という言葉は、とても大切な真実を含んでいると思う。あるいは発達心理学を説いた、E・H・エリクソンの、「与えられるものを得ること、そして自分がして欲しいと願うことを、自分のために誰かにしてもらうことを通して、乳児は同時に、将来自分が"与える者"になるために必要な適応の基盤を培うのである」という言葉のほうが直截的だろうか。

いずれにしても、この期間、母親は「子供の欲求をそのまま叶える」という手段によって、主体の心と出来るかぎり密着しなければならない。

乳が欲しければ与え、オムツが重ければ取り換え、眠ければ抱っこしなければならない。これはエリクソンが語った「基本的信頼」と同じことだ。この期間だけは、母親は可能な限り、子供が欲しがっているものを、そのまま与えなければならない。

乳幼児は遠慮を知らないので大変だが、それでも唯一、この単純なやりとりだけが、母と子を一つに結びつけるのだからである。そして、それによって生まれた密着感が、主体をして"愛されていること"を実感させるのである。

雪の日の風呂

四、五歳ぐらいまで通用する話だが、譬えると、この「外在化された妊婦」の時期は、雪の日の風呂のようなものなのだ。

この時期、実世間の大変さを教えようとするあまり、子供に「甘えるな」とばかり、厳しい躾

を与えたり、疎遠にしたり、と、母子の間に妙な距離感を作りだしてしまう母親がいる。理性的でありたい、道理に則りたいという「知的で良き母」のタイプだ。

しかし、これを雪の日の風呂に当てはめると、彼女がやっていることは、寒い外気温に慣れさせようとして、子供が入っている風呂の温度を、なるべく外気温のそれに近づけていることに等しい。きっと、この母親は、

「さすがに水には出来ないけれど、外気に慣れさせるには、ギリギリまでぬるくしたほうがいいのだろう。この子は、結局外に行かなければならないんだから」

とでも言うのだろう。けれども、そんなぬるい風呂に入れられた日には、子供は外気に触れたとたんに風邪をひいてしまう。ちっとも体が温まっていないのだから当然だ。

それに対して、世間が厳しいからこそ、その人生初発の時期を、甘い密着性、濃厚な一体感で満たしてあげようとする母親は、雪の日の風呂で「外気が寒いからこそ、子供を熱めのお湯に浸けてあげよう」と考える者に等しい。

そのような風呂で十分に体を温めた子供は、たとえ雪が降っていようとも、しばらくの間、平気で外を駆け回ることが出来るだろう。体の芯に、まだ余熱が残っているからである。肌は冷たくなっても、決して風邪をひくところまでは行かない。

つまり母親との一体感の記憶によって、子供は世間（保育園や小学校でさえ、彼にとっては世間だ）の荒波を超えていくだけの強さを、身に付けられるのである。

本能が実現可能にする困難

ところで、母親が子供の欲求を叶えることを、私は少し「難しい」ことのように印象づけてしまったかもしれない。子供が欲しがるものを「与えなければならない」という言い方をしてしまったからだ。これでは読者には、苦勞してでも義務を果たしなさい、といった調子に聞こえてしまうだろう。

たしかに眠い時にミルクを用意したり、腕が疲れているのに抱っこをし続けるのは大変なことである。おまけに、何をどうやっても子供が泣き止まない夜もある。

しかし、多くの場面において、この時期、母親が子供の欲求を叶えてあげることが容易である。男には不思議に見えることだが、彼女の母性本能が、その困難な課題を自然にクリアさせてしまうからだ。

彼女は湧き上がってくる母性に突き上げられて、ほとんど自動的に、子供が求めてくれば乳房を出し、あるいは粉ミルクを混ぜる。お尻を気持ち悪がって泣けばオムツを取り換え、理不尽なことを言っても、笑ってそれを許してしまう。その子供が、彼女の子供である限りにおいて、その存在そのものを受容しきってしまう。

それもそうだ。だって我が子が可愛いのだから。可愛くて仕方がないのだから。可愛くて可愛くて、その子が求めるものを、与えずにはいられないのだから。我が子を可愛いと思った時点で、彼女の母性本能は、すでに機能しはじめている。

その母性本能による全受容こそが、母子一体感の本質であり、母と子を混在させる最大の力である。子供は何の力もないが、その無力さこそが、母性本能に支配された母親にとっては、たまらない魅力である。母親は「子供を守らなければならない」と思うのではない。ただ守りたくてたまらなくなるのである。

妊婦では、肉体が無力な主体を包み込む。外在化された妊婦では、母性本能が無力な主体を包み込む。ここに混在的一者の、もっとも基本的な構造が表れている。

男性原理と女性原理

教育の初期とは、赤ちゃんである主体がハイハイをするようになってから、幼稚園や小学校などの"家庭外の"共同体に通うようになるまでの期間を指す。つまり、いわゆる家庭教育がメインとなる時期だ。

しかし、迂回のようなものであるが、この時期の主体について語るために、私は今、どうしても「男子原理と女性原理」について述べなければならない。これは「ヘルメスの杖」全体を貫く大切な原理なので、やや抽象的な話にはなるが、どうかお付き合い願いたい。

まず男性原理だが、その意味するところは「分けること」である。ゆえに、分離、分化、分析、集中、抽出、収縮、といった言葉が、この原理に属している。

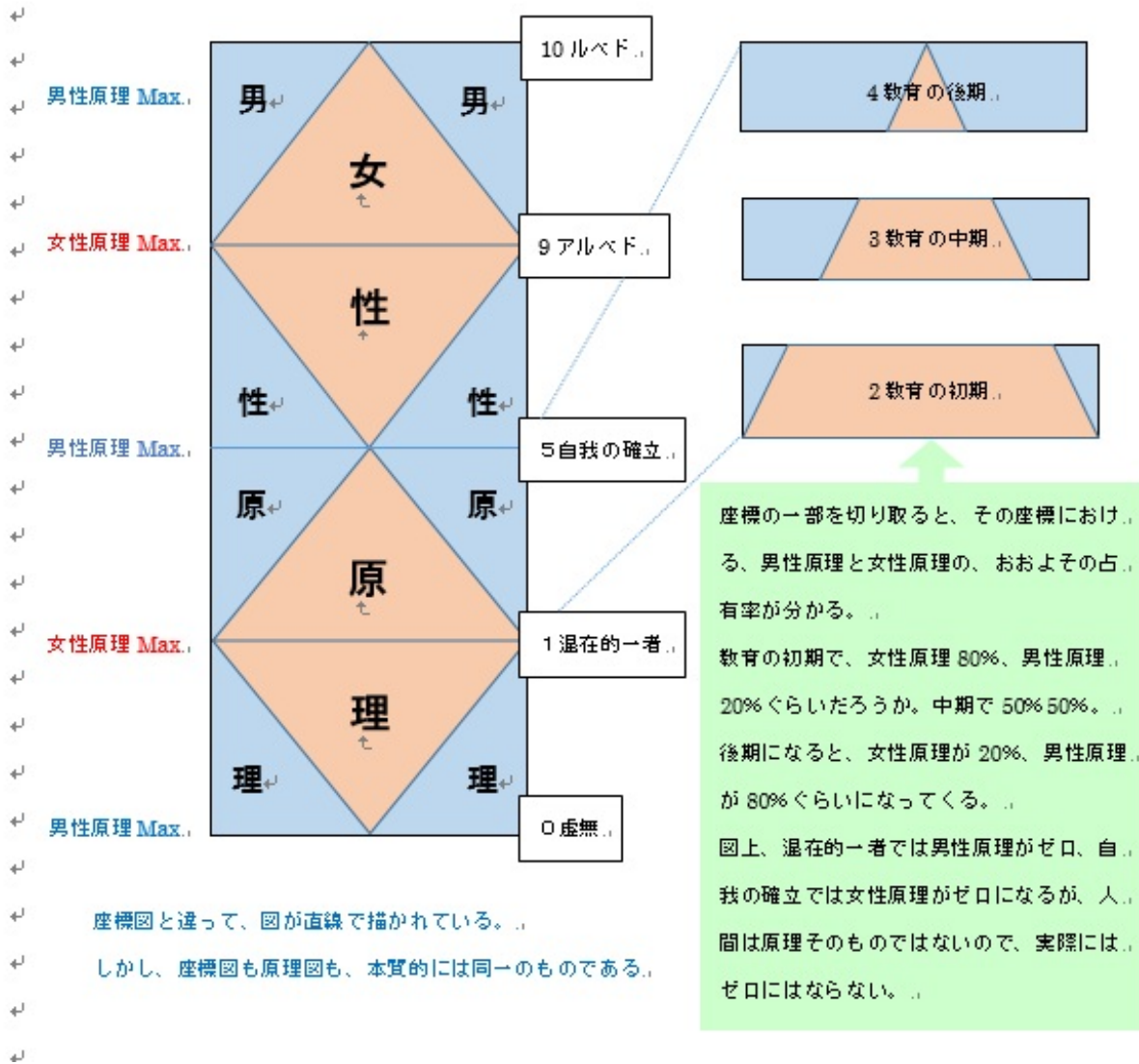
つぎに女性原理だが、こちらが意味するのは「結びつけること」である。ゆえに、混在、総合、拡大、一者化、結合、エロス、といった言葉が、この原理に属することになる。

二つの極点を結ぶ過渡的期間

人生始発の情景である混在的一者（前節）は、もちろん女性原理が強く働いている状況である。というより、それは女性原理（母性原理）のマックス状態だとさえ言えるだろう。とくに妊婦の場合、男性原理（胎児である息子）が脆弱なので、女性原理がその存在のほとんどを占めてしまっている。

そして、そんな混在的一者が、徐々に男性原理の"分ける働き"の干渉を受けていくのが「教育の段階」の進展であり、初期、中期、後期、という段階を経るにしたがって、男性原理の干渉力はどんどん強くなっていく。そして、座標5の「自我の確立」に至って、男性原理は、ついにそのマックス状態を迎えるのである。

男性・女性原理の図（原理図）



原理図を見れば分かるように、「5 自我の確立」段階における女性原理の拡がりは、もはや交差した線分が作りだす"点"ほどしかない。自分以外のものを分離しきった自我という意識は、ついここまでの収縮、収束を実現するのである。

それゆえ自我の確立段階は、まさに"分けること"である男性原理の権化だと言ってよいだろう。この段階まで至ると、女性でさえ、かなり男性化してくるのが実情だ。

つまり自我の確立（男性原理の権化）は、混在的一者（女性原理の権化）のアンチテーゼである。そして教育の段階は、その二つの極点を結びつける過渡的期間なのである。

したがって、教育の段階に特徴的なことは――女性原理によって包み込まれたかのごとき、「母 - 息子」の結合閉鎖世界（混在的一者）に、両者を分離するべく、ついに男性原理が干渉してくる、という事である。

もっとも「干渉してくる」などと言うと、主体にとっては完全に受け身の状況となるが、これは実状とピッタリとはそぐわない。なぜなら次に見るように、主体のほうも、みずから男性原理の干渉を望むからである。

冒険の楽しさ

たとえば、遊園地のアトラクションが「スリル満点のアドベンチャー」と宣伝されていたらどうだろう。あなたは、それを「面白そうだな」と思うのではないだろうか。

だが、そこには確かに「危険性」と「未知のものに対する不安感」とが明示されている。これらは混在的一者（母子一体感）として安息していた主体にとっては、紛れもなく"嫌なもの"である。それはそうだろう。どちらも、それまで保持していた安息を奪い取るものに他ならないのだから。

にも関わらず、私たちはスリルとアドベンチャー、危険と冒険を好ましいものだと考える。それらに身を投じるさいに、安息を奪う厳しさや辛さが伴うのを、当然のことだと思っている。

とすれば、どこかに考え方の転換点があったのだ。

それこそが「教育の初期」であり、その内容は、男性原理の干渉、または男性原理の干渉を求める心理、である。

上述のとおり、混在的一者は「母 - 息子」が結合した閉鎖世界であり、それに対して、男性原理は「分けること」を意味する。そうだとすれば、最初に母親から主体を引き離し、主体に「閉鎖世界の外の世界」を垣間見せるのは、当然のこと、主体の"父親"になるだろう。

もっと明確に示せば「教育の初期における家庭教育において、男性原理の体現者となるのは、主体の父親である」ということだ。

夫が父親になる

つまり、それまで（混在的一者の時期）は、主体の母親を"夫"として支え、「妻 - 夫」という、いわば主体にとってのアナザー・ワールド（別の世界）で活躍していた男性が、ついに主体の視界に入り、"父親"として、主体に「母親との分離」の手ほどきを始めるのである。

そうやって主体の視界に父親が入ったのは「ヘルメスの杖の登坂」という"生の義務"が正常に、

この時期の主体に働きかけたからだと言ってよい。やがては「自我の確立」という分離性の極みに到達しなければならないのだから、そろそろ男性原理の幾分かは、どうしても受け入れる必要があるのである。主体は、それを本能的に感じたのだ。

父親の干渉によって、主体の行動範囲はかなり広がっていく。

ある程度動けるようになった主体は、父母両親によって遊びに連れていかれ、いたずらしたり、すこし危険な遊びをしたり、はたまた大暴れをすることもある。

そのとき母親は危険を心配し、父親は、その危うさを善しとする。彼は「少しぐらいの怪我ならば構わない。それが学びなのだから」と、笑ってそれを受け入れる。

子供が転んで泣けば、母親は主体を抱きしめ、父親はその転んだことを笑っている。そんな感じが「教育の初期」の原風景だと言えるだろうか。

父親が教えるもの

父親は知っているのだ。人が、傷つきながらでしか、危険を受け入れながらでしか、冒険できないことを。冒険しなければ世界を拓げられないことを。広い世界でしか、自分の能力を高められないことを。能力を高めなければ、人が、自分の在るべき場所を確保できないことを。

柔らかく保護されて生きている井の中の蛙は、いったん社会に放り出されれば、その社会の最底辺で喘ぐしかない。自分の子供に、そのような思いをさせたい父親などはいない。

それは、もちろん母親も知っていることだが、彼女の場合、子供への溢れんばかりの情愛が、その目を曇らせる。彼女はずっと子供と一緒にいられることを当然視してしまい、いつまでも、どこまでも、我が子を、その優しさで包み込もうとしてしまう。

だが父親は、いつか子供が自分たち両親から離れたところで独立し、そこで一人で生きていかなければならない存在だと分っている。なぜなら、自分自身が、否応なく、これまでそのように生きていく事を強制されてきたからだ。誰からというのではなく、社会の摂理として、それを強制されてきた。

だから、そうやって一人になったときに、子供が困らないようにしようと、父親は、主体に自立のための教育、独立のための訓育を与える。そこには当然、ある種の厳しさが伴う。

厳しい愛、父性愛

厳しさとは、危険を承知で何事かを成し遂げさせようとする事であり、ある程度の突き放しであり、相手が自分から離れていくことを促す態度である。それゆえ、そっけない、かなり薄情な印象を与えるものである。

しかし、これもまた愛なのだ。混在的一者の中で見られる優しい母性愛とは真逆ではあるけれども、子供の先々を思えば、どうしても欠かせない愛なのだ。一言で言ってしまえば父性愛と呼ぶべきものだが、この男性原理に満たされた愛も、母性愛と同等に認められるべき愛の姿なのである。

そして、前節でも述べたように、このような父性愛を、教育の初期にある主体自身が求めているのである。スリルとアドベンチャーを欲しがっているのである。

もちろん、まだまだ家庭教育のなかで多くの部分を占めているのは母性原理である。まだ四、五歳の子供の話をしているのだから、母親の優しさや柔らかさが、主要なものとして必要とされているのは当然だ。しかし、そろそろ僅かなりとも父性原理の干渉が、同じ家庭教育の場で必要になってくる。教育の初期においては、そのようなバランスの移り変わりが起こるのだ。

まとめると――まず母親との結びつきによって築かれている強い土台（混在的一者）があるのだが、そこから僅かに主体の「外界への好奇心」が芽生える。

そして、その好奇心を育て「将来における社会的独立性」に結び付けようとする父親の"厳しい愛"が、主体に働きはじめるのが、教育の初期の内容だと言えるだろう。

二つの原理の間

女性原理は「結びつけること」であり、男性原理は「分けること」である。

そして、すでに述べたように、混在的一者は、女性原理（母性原理）のマックス状態であり、自我の確立（座標5）は、男性原理のマックス状態である。

だとしたら、混在的一者と自我の確立の間にある「教育の段階」の、そのまた中央にある「教育の中期」では、原理的に見て、果たしてどういう状態が浮かび上がるだろうか。

そう、当然のこと、女性原理（結びつけること）と、男性原理（分けること）が同等に働き合っているような状態が予想される。

となると、教育の中期の具体的なテーマは「所属と自己責任」ということになりそうだ。

所属と母なるもの

混在的一者の段階にあったとき、主体はまるきり母親に依存し、完全に母親に所属していた。主体の主観にとって、母親は、まさに世界そのものであった。いや、むしろ客観的には、一人の母親が世界そのものだなんて事はないけれども。

これに対して、教育の中期においては、主体は、学校や職場、地域社会などに所属することになる。もっとも「職場」なんて言葉を出すと、読者に、

「なんだ、主体は、急にそんなに大きくなってしまったのか？」

などと驚かれそうだ。

が、実のところ「教育の中期」は、もしかしたら、人生そのものを貫くかもしれない心理段階なのである。事実、死ぬまで、この「教育の中期」に留まる人も多い。むしろ人類のなかで、もっとも多くのシェアを占めるのが「教育の中期に属している人々」なのだ。

そのように多くの人たちが、学校や職場、地域社会に所属している訳だが、意識してはいないものの、彼らはこうした共同体に所属し、依存しているという点で、明らかに母性原理に与っている。

彼らにとって、学校や職場、地域社会は、ほとんど"世界そのもの"なのである。赤ン坊の主体

にとって、母親がまさに世界そのものであったように。学校を母校と、職場を終身雇用の場と、地域社会を故郷と呼ぶのならば、そこには確かに"母なるもの"のイメージが重なっている。

責任と父なるもの

ただし、学校や職場、地域社会が、客観的、社会的役割を持っている点では、そこに男性原理が働いていると言える。そこでルールを破れば、無慈悲に排斥されてしまう、という点に、男性原理の「分ける」性質が働いているからだ。

つまり、そこには個人的な感情では破ることの出来ない"法と秩序の支配"があり、自分の子供である限りにおいて、子供のどんな欲求も通させてやっていた母性本能（女性原理）では太刀打ちできない客観性が働いているのである。

法やルールを破れば、停学、退学、減俸、免職、告発、刑事罰、といった形で排除を受けるし、そうなる以前にも、きっと厳しい態度での勧告があることだろう。そうした勧告を受け入れれば、主体は集団に残れるが、そうしない場合には、集団から排斥されるほかないのである。ここに自己責任を取らされている主体の姿がある。

ただし、ここで言っている集団（学校や職場、地域社会）は、まだ広範な普遍性は持っていないので、ある集団から罰を言い渡されても、そこ以外の集団に居場所をシフトさせれば、通常の生活を送れる場合もある。転校や転職、引っ越しによって、まるで何事もなかったような生活を送ることが出来るのである。

それを阻むものがあるとすれば、集団を「世界そのもの」のイメージと重ね合わせてしまう女性原理の働きだろう。この場合、学校や職場、地域社会は、まるで母なる大地のように「そこで生まれ、土に帰る唯一の場所」となる。つまり、他の場所、他の世界があることを、主体が、想像すら出来ないように働きかけるのだ。

逆に言うと、ある場所からの"分離"は当然、男性原理の働きによるものだが、その働きが弱いと「既知の集団から分離して、自分の居場所をシフトさせる」という発想が、そもそも生まれてこなくなるのである。

結果、ある集団からの罰、排斥勧告は、主体の中で絶対化してしまっ、ついには"大地に戻る"の強制となる。つまり彼は、そこで死ぬしかなくなるのである。ここに、転校もしなければ転職もしない、引っ越しもしないで「自殺」する人間像が現れる。

実に痛ましい話だが、このような悲劇が起こる頻度は決して少なくはない。

共同体への適応

さて、教育の中期に到った主体には、もう一つの「生き方のテーマ」がある。

それは、上に掲げた、学校、職場、地域社会——ここから先は、一括して「共同体」と呼ぶことにしよう——に適応するという課題である。

共同体には、永年にわたって培われた「生活を便利にする情報」が蓄積されており、その情報を曳いてくることによって、主体の人生は、きわめて濃密な"質"を持つことになる。

たとえば、原始生活を送っている人たちが5人だけ住んでいる孤島で暮らすのと、数千年の歴史を持ち、その歴史の情報を、書籍やコンピューターでいつでも閲覧できるような文明の中で暮らすのとでは、主体の人生の質は全く異なってくるだろう。

文明を持った共同体に適応すれば、主体は、数千年におよぶ歴史のエッセンスを身に付けた能力者になれるのである。もちろん、その歴史の中には、自然科学の歴史も、芸術の歴史も含まれている。

模倣・暗記・服従

そのように人生の質を高めてくれる「共同体への適応」は、はたして、どのような形でとり行われるのだろうか。それは端的に「模倣、暗記、服従」と表現することが出来るように思われる。

模倣、暗記、服従——この三つは「空間、時間、倫理」というカテゴリーに対応しているが、まず空間のなかに"共同体の代弁者"がいるとき、その代弁者がやっていることを真似ることによって、主体はその模倣を通して、共同体の情報を、自分のもとに呼び込むことが出来る。

つぎに、時間的系列の中で整理されている情報を暗記することによって、主体は共同体の情報を、自分のもとに呼び込むことが出来る。

そして、共同体が課してくる倫理的規範に服従することによって、主体は共同体から排除されることなく、その共同体内での生活を約束される。こうした"生活の安定"が前提になれば、模倣も暗記もあり得ないというのが実際のところだろう。

ということは「模倣、暗記、服従」というのは、共同体が持っている情報に「差し込まれるべきストーリー」であって、このストーリーを通して、情報は主体のもとへと移行されるということになる。

そして、情報が主体のもとへ移行するほどに、主体は「共同体の代弁者」としての地位を確立していくのである。そうすると今度は、彼の方が、共同体への新参加者に対して「模倣、暗記、服従」という要求を突きつける立場となる。

かくして主体は、教育の中期の体現者となるのである。

共同体から自我を抽出する

混在的一者のところで触れたことだが、錬金術における最初の作業は「材料を混ぜて加熱し、ドロドロのペーストを作る」ことだった。そして、本章の論述は、錬金術に当てはめると、すでに作業の第二段階に入っているのだが、かかる第二段階の課題とは、

「ドロドロのペーストを蒸留することによって、混在していた元素を引き離し、混じり気のない各元素を抽出する」ことなのである。

実際の錬金術師たちが求めた元素は、おもに硫黄と水銀であったが、いずれにせよ、これは紛れもなく「分けること」であり、ゆえに男性原理によって貫かれている。さらに言うと、ここには「ある特定の元素」と「それ以外の元素」という二元的な世界観が現出していることにも注目すべきだ。

そして、この二元的な世界観が、現実の人間関係のなかで徹底されたものが、「自分」と「自分以外のもの」が純粹に弁別される"自我の確立"段階なのだが、教育の後期とは、要するに、この段階に到るための努力ということになるだろう。

これを錬金術風に表現すれば「"自我"という元素分離のための、蒸留による抽出作業」ということになるかもしれない。

その自我を抽出するためのツールが、次節で出てくる「集中、因果律、遵法」なのだが、これらは、錬金術に置き換えれば、かまどの火や蒸留器にあたるものだろう。

自我を獲得するために

さて、すでに述べたように、教育の後期における主体のテーマは「自我を獲得するための準備」、あるいは「自我を確立するための努力」である。これを定型文として表すと、「主体は～によって自我を獲得しようとする」という文脈になる。

先回りして言うと、自我とは、空間的には個性、時間的には合理性、倫理的には良識である。そして教育の後期に到った主体は、空間的には、

「集中によって個性を獲得しようとする」

のであり、時間的には、

「因果律によって合理性を獲得しようとする」。

そして倫理的には、

「遵法によって良識を獲得しようとする」

のである。

次節では、これら「集中、因果律、遵法」と「個性、合理性、良識」との関連性について簡単に見ていこうと思う。

集中によって個性を獲得する

教育の中期における主体のテーマは「共同体への適応」だった。

そこでは、主体は、共同体のルールによって、客観的な"自分"を見つめる機会を与えられるが一ルール無用の混在的一者では、主体即母親なので、自分を見つめる機会は全く与えられない一要は共同体の一部となるので、主体は、彼自身であるよりは、どうしても共同体的な存在になってしまう。

空間的には、主体は模倣を行うことで、共同体の情報を自分のほうに推移させていた。が、これをやっている限りは、当然のこと、彼は共同体の模倣体でしかない訳だ。

しかし、模倣に模倣を積み重ねて、その度合いを深めていくと（＝模倣への集中）、その練達の極みのなかで、主体は逆説的に、

「忠実にお手本を真似てきたけれど、自分としては、ここだけは、どうしてもこうしたいのだ」という違和感、あるいは、さらにそこから一歩進んで"自分が自分でありたい"という欲求を感じるようになる。

まさに、この欲求を感じるからこそが、主体にとって、個性獲得の始まりとなるのであり、この欲求に従って、彼が実際に「ここで自分としては、かくあるべし」という思いを形（行為）にしたとしよう。

そして、その上で、

「この行為に対して、もし共同体から批判が与えられるならば、その批判はすべて受け入れる」

と肝が据わったならば、そのあたりで、だいたい主体の個性は確立されたと言ってよい。なぜなら、主体の人格は、今や共同体と分離して対峙しているからだ。しかも、逃げ隠れせずに堂々と。

必要とされる勇気

共同体との分離と対峙――これは本当に大変なことであり、「自分が自分であることが、共同体からの批判の対象になってもいい」と割り切るのは、かなりの勇気が要ることである。自分がどれほど模倣に集中したか、共同体の情報を自分のなかに取り込んだか、その実績に対する自信と自負がなければ、なかなかこういった勇気は出てこない。

実際、やるべきことをやらないかぎり自信などつく訳もないし、自分に自信がない人間に、勇気など出てくるはずもない。

そもそも多くの場合、勇気と見えるものは、単なる身の程知らずの蛮勇である。そして、身の程を知らない（＝自分を知らない＝自我ではない）蛮勇は、すぐに共同体によって角を矯められてしまう。

ここで必要とされているのは、飽くまでも、模倣への集中によって培われた、本当の自信、自負、勇気なのである。

因果律によって合理性を獲得する

因果とは「原因と結果」のことである。

つまり「～によって～が生じる」「～のせいで～が起こる」といった形の文脈であり、このスタイルでものを考えていくことを因果律という。

もっとも、仏教では因と果のあいだに縁を置き、ヒュームは因果を結び付けるのは可能性に過ぎないと言う。どちらも因果律の精緻さをアップしようとしたり、より内容を厳密化するためのヴァリエーションだと言ってよいだろう。何にせよ、因と果（原因と結果）を言うておけば、因果律のスタイルの基本は言い尽くされている。

この因果律を用いると体感的に分かるのが、そこに「時間の流れ」が生じることだ。

原因が原因のままであるならば、時間は止まったままだが、原因が結果を呼び込むと原因が過

去になり、結果が今になる。そして、結果としての今を、新しい原因として捉え、まだ見ぬ結果を未来に想定するならば、

「かつてこのような事が起こったということは、これからも（これからは）こういった事が起こるだろう」といった"予測"が可能になり、そうして、ここに未来に向かっての時間も流れ始める。

よって因果律は時間の流れと切り離せないものであり、となると、ここで語られるのは時間的な話だということになる。それに対して、先の「集中によって個性を獲得する」という内容は、空間的な話だと言ってよいだろう。

それはさておき、共同体から暗記によって得られる情報というのは、けっこう結果だけのものが多い。確かに因果的な説明もあるのだが、共同体の利益のために恣意的に曲げられた情報や、あまりにも拙速に結び付けられた因果的説明も少なくない。

それらを見ていて「もっと理を知りたい」「もっと、ちゃんと納得したい」と思ったときが、時間的な自我の芽生えであって、自分で情報を探し、そして自分なりの原因と結果を組立てられたときには、それを時間的な自我の獲得だと言ってよいのではあるまいか。

なぜなら、そこまで行けば、彼が持っている情報は、すでに共同体の情報というよりも、主体によって再構築された"彼自身の情報"になっているからである。

それは、もちろん間違いもある。未来予測であれば、間違えることのほうが多いだろう。しかし、その間違いに対して「誤りが明らかになれば責任を取ろう」とまで思えたならば、それは獲得された時間的な自我の範囲内での出来事である。

遵法によって良識を獲得する

「倫理的に共同体に服従する」という、教育の中期における主体のあり方は、もっと簡単に表現すれば、要するに「法律に服従する」ということである。

実際問題、法律に対して、私たちは服従するしかないし、法律のほうも常に強制的に迫ってくる。それは場合によっては、実に不愉快千万なこともある。

しかし、この一見不愉快千万な、法律というものが無くなってしまったらどうだろう。そのときに現出するのは愉快的自由の謳歌だろうか。

いな、違う。そのとき現れるのは、この世の地獄である。各々が、てんでバラバラに自分の自由を行使すれば、そこに自由同士の相克が生まれ、軋轢が生まれ、争いが生じるに決まっている

からだ。

もし信号機が機能しなくなれば、赤信号で止まる煩わしさは消えるだろう。だが、交差点に突進する複数の車は、その衝突事故によって、この世の地獄を現出させる。

ここで言っているのは、それと同じようなことだ。法律という調整役が機能しないかぎり、「自由の相克が生み出す地獄」の現出を、私たちは、どうあっても抑制できないのである。

私たちは法律によって、いくばくかの我慢を強いられるが、その我慢によって地獄の現出を抑制しているのである。

その点で、たとえ不備な法律であっても、法律を失うよりはよいとすら言える。まさに、悪法は無法に勝るのである。だからソクラテスは、悪法に義理立てして毒杯をあおったのである。

法律の大切さは、教育の後期に到った主体も認めざるを得ない。彼は法律の強制感にただブー言っているだけの、教育の中期の大人気なさからは、すでに離れている。そして、共同体を守り、維持することに自分なりの責務を感じるような"大人の階段"を、すでに登り始めているのである。

ここに遵法の精神が生まれる。

遵法とは、強制に対する服従ではなく、強制される前に"自主的に"法律を守る姿勢であり、それが出来るのは、法律の大切さを、彼が身に染みて知っているからだ。

そして、この自主性が、既存の法律を超えるレベルで働くのが「良識」であり、それについては自我の確立段階で語るとしよう。

第二部 分化の極み

座標5 自我の確立

男性原理優勢の極限

自我の確立段階は、混在的一者のアンチテーゼである。アンチテーゼとは、前提となるものの"正反対のもの"のことである。

だからこの場合、それは第一に、自我の確立段階が、「女性原理がマックスの状態（＝混在的一者）とは正反対の、男性原理がマックスな状態」であることを示している。

第二に、そこでは、「結びつけること（＝女性原理）とは反対である、分けること（＝男性原理）が強調されている」ことを示している。

さらに言えば「男性原理＝分けること」の確立が、二元性、二元的な世界観によって表されること。それを人間の認識として表現すると「自分」と「自分以外のもの（共同体）」という図式になることを「教育の後期」において言及した。

しかし、教育の後期は、その状態を生み出すための努力をする段階であり、自我の確立は、その努力の達成、または成就である。そこに自ずと、両者の違いが出てくるだろう。

自他二元＝個性の確立

空間的に見ると、二元性は「自他二元」として現れてくる。

自他の"自"とは主体のことであり、もっと明確に言えば、主体の個性のことである。一方の"他"とは、他人たちの総称である共同体のことだ。

少しだけ振り返ると、個性は、模倣行為への集中によって獲得される。共同体のうちにある規範を模倣して、その規範に追いつくところまで行って、そのとき初めて得られる違和感、そこに主体の個性の萌芽がある。

そして、その違和感を無くすために「この場合、自分ならこうしたい」という欲求に従い、そ

の結果得られた「自分の趣向、好みはこういったものである」という確信、自負に対して責任を取れるようになれば、そこで主体の個性は確立されたと言ってよい。

もっとも、基本的に個性は、自分で認識するものというより、どちらかと言えば、他人によって認識されるものである。むしろ、

「自分とはこのような人間だ」と、あまりに言い切ってしまう人間は、その個性が、単なる自己演出でないかを疑う必要さえあるだろう。

主体は、ただ自然に生きているだけなのに、それが他人の目には、強烈な個性の露われとして映る。そうした状況が、たいがい本物の個性の現出なのである。

脱同一化と脱手段化

個性の確立者には、その確立していることを教える、明確な指標が存在する。それが「脱同一化」と「脱手段化」である。

順を追うため、まず"脱"が付かない、その元々の状態について説明しよう。

同一化とは、主体が他人の意見のなかで生き、他人に依存し、まるで主体が他人のようになっている心理状態を言う。他人の集合が共同体なのだから、端的に言うと、主体が共同体的になっているということだ。

そこには無責任と責任転嫁という特徴が見られる。自分の失敗や未熟をすぐに他人のせいにして、自己責任など、絶対に負いたくない様子がそれだ。

もう一つの「手段化」とは、他人を自分の道具（何かを得る手段）のように使うことである。かつてカントが語った「人格とは手段ではなく、それ自体が目的である」という言葉の逆をいく生き方だと言えるだろう。

他人を道具扱いするならば、自分の役に立たなくなった時点で、他人を傷つけようが、迷惑をかけようが、主体の良心は痛まなくなる。奴隷制のなかで、主人が奴隷の境遇を憐れまなかつたのと同じように。現代に奴隷制はないが、他人を奴隷のように扱う心象は、たしかに巷間に溢れている。

個性を確立している主体は、これら「同一化」と「手段化」から脱している。彼は、自分の個性を尊重するのと同様に、他人の個性も尊重する。他人の心理領域に侵食されたり（同一化）、他人の心理領域を侵食したり（手段化）しない。

すなわち、彼の個性は、まさに他人（共同体）と二元的に分離しているのである。

真偽二元＝合理性の確立

時間的に見ると、二元性は「真偽二元」として現れてくる。

真偽の真とは、主体が因果律によって再構成した共同体の情報であり、偽とは、その因果律に含まれなかった情報である。

もっとも、場合によっては、偽の範疇からも情報が選択されるし、その逆に、真として扱われていた情報も、場合によっては、候補から外されることがある。真は、ある一つのテーマに沿って形成されるだけの、限定的な正当性しか持ちえない認識なので、テーマが変わるごとに、その構成要素もどんどん変わってしまうのである。

そして、そんな「真」を作るためには、その前提として「分析」が必要となる。

分析とは、物事を分けていって、最小単位の「個」を露出させることである。価値のある"真"の構成材料にするためには、物事を、それが明晰な「個」として見えるところまで分けていかなければならない。デカルトの言葉を借りるならば、

「検討する難問の一つ一つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くために必要なだけの小部分に分割すること」が必要なのである。この小部分の各々が、私の言う「個」に当たるわけだ。

そして、その「個」を、因果律によって"正当に"並べたとき、それは合理的な認識と呼べるものとなる。それが合理性の確立ということであり、また「真」が現出したということでもある。

専門分化の背景

ただし人間には限界というものがある。あまりにも多くの情報を前にしてしまうと、それを分析したり、分析によって生じた情報素因（個）を正当に並べたりすることに、すっかり疲弊してしまう。これは当然のことだろう。

しかし、自我の確立者にとって「合理的な認識をする」ことは、必須の思考様式、思考スタイルなので、それは第一義的に守らなければならない。そこで彼のなかで、必然的に"専門分化"ということが起こるのである。

つまり主体にとっての世界（守備範囲）を狭めることによって、彼が取り扱う情報の量を制限するのである。情報が少なければ主体の分析力は維持されるし、その因果的正当性もまた、高い水準を維持できるようになるからだ。

もちろん、それは主体の世界観を狭量にせざるを得ないが、自我の確立段階にある主体は、これを別に不都合とは思わない。

というのも、ここには、ある意味で"自他二元"が表れているからで、彼には、専門分化された一分野を"自分の個性"として感じる事が出来るのである。つまり「自分の担当分野」と、「自分の担当分野以外のもの」といった具合に。

そのため主体は、むしろ自分が、一つの分野のスペシャリスト（専門家）であることに心地よさを覚え、その立場を誇りにさえ思うのである。

よって、合理性の確立者には、いわゆる"専門家"が多いと言えるだろう。

善悪二元＝良識の確立

倫理的に見ると、二元性は「善悪二元」として現れてくる。

善悪の善とは良識のことであり、悪とは、主体の良識によって判断された「その場面で最適と思われる倫理性」から漏れた、すべての倫理である。これを説明するために、順を追って話していこう。

教育の後期で出てきた「遵法」とは、自主的に法律を守ろうとすることだが、その法律というものが、つねに正しいものであるという保証はない。法律という響きは大層なものだが、所詮は人間がこしらえたものだからである。

つまり、法律のなかにも悪（過ち）が含まれているのであり、その帰結として、ただ自主的に法律を守っているだけでは、つねには善と悪を峻別できない事になる。遵法では、どこかの場面で二元性が破綻するわけだ。

たとえば『日本国憲法』など、その典型とすら言える。一般に憲法は、法律よりも上位にある倫理的規定であり、法律よりも大切とされているものだ。

しかしながら、この日本国憲法を守っていれば、日本国民の安全と幸福が約束されるかと言えば、到底そうとは言えないだろう。

なにしろこの憲法、そのまま施行されると、国防思想を骨抜きにして、どこぞの侵略国家に、丸腰の日本国をアッサリと差し出す効果があるのだから。

そのような憲法を遵守することが、倫理的に見て、純粹に正しいはずもない。この場面における遵法の善悪二元の破綻は明らかであり――先取りして言う――まさしく、この憲法は、良識によって改められる必要があるのだ。

もっとも、日本国憲法の絶対遵守を訴える人々は「いまだ良識の段階に達していない」というよりは、もっと積極的に、意図的に、日本を、シナや韓国の貢物にたくて策謀を重ねているのだろう。

イエスによる良識の表現

二千年前のイスラエルでは、モーセの「律法」が、この日本国憲法に相当するのだろうが、その律法によって定められている安息日（強制的休日）に対して、イエスは次のように言っている。

「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」

『マルコによる福音書』

これこそは良識の言葉である。

休みの日に良いことをして何が悪いのか？ とイエスは問う。何も悪くない。それが、単純すぎるほどの良識的判断だ。当たり前と言えば、当たり前のことである。

なのに、律法の遵守者（あるいは服従者）たちは、イエスを侮蔑と憎しみの目で睨みつける。神の教えをないがしろにしていると責め立てる。

しかしイエスはたじろがない。そこに良識の確信があるからだ。そのように、本当の正しさのためには、法律さえ破れるのが良識というものであり、それは法律からの復讐（罰則）に対しても、敢然と立ち向かうのである。

このようにして、良識の確立者にとっては、自分が判断する「善」「最適な倫理」以外のものは、たとえそれが法律であっても、善の外側に置かれる。そうして、法律の内側で働いていた遵法では峻別できなかった善悪が、法律の外側に超えてた良識によって峻別されるのである。

それは善悪二元の達成であり、同時に、主体の倫理的自我が確立したことを告げるものである

最低限の結びつき

自我の確立段階は、男性原理優位の極限状態であり、それゆえ分化の極みでもあるが、この分化は、かろうじて分散や散逸は免れている。

もしも、自我の確立段階に、男性原理しか無かったならば、たしかに人間の自我は、各々散逸してしまっていたかもしれない。

しかし、主体は"人間"であり、人間は、男であろうと女であろうと——むろん割合は変わるが——男性原理と女性原理の両方を持ち合わせている。つまり、人間の集合体（社会）で、いくら男性原理が強調されようと、それでもなお、そこに幾ばくかの女性原理は、必ず残存しつづけるのだ。

振り返ってみれば、女性原理優位の極点である混在的の一者においても、母体と胎児、母親と赤ん坊、という要素は、たしかに物体としては分離していた。無理やりになれば、各々を引き離すこともできた。

つまり、そこには最低限の男性原理が働いており、それが強力な女性原理によって、心理的に覆い隠されていた、というのが、混在的の一者の"隠された"構図なのである。

結局、人間であるかぎり、原理そのものにはなりきらない。そういうことだ。

では、話を自我の確立段階に戻そう。

そこでは分化を意味する男性原理が強力に働いているが、主体（または主体たち）は人間であるので、いちおう最低限度の「結びつけること」は執り行われる。じつに、最低限度にして希薄、味気ない結びつきではあるが。

それが契約関係である。

契約関係について

契約関係とは、ほとんど書面的とも言える、味気ない人間関係であり、「文書によって確認がとれた場合のみ、自我同士のギブ・アンド・テイク的な関係が"正式なもの"として保証される」というものだ。

このような人間味のない関係は、訴訟社会であるアメリカで、目立って発達した。その淵源は、神との契約を自らの宗教とした、ユダヤ人からの影響であろう。だから当然、キリスト教では「ユダヤ教に帰れ」という意味合いを持っていたプロテスタントが、その思想的担い手になっている。

日本もまた、最近ではそのアメリカナイズによって、ずいぶん契約書、注意書きの類が増えてきた。ともかく書面確認された上での、契約履行が正義、契約不履行が悪、というのが、基本的な自我の立場なので、それが一般化された現代においては、きっと、

「近ごろ、何をするにも文章説明とサインが必要なんだな」

と面倒くさがっている人も多いのではないだろうか。

実際、多くの――自我を確立していない――人々が違和感を持つなか、それでも社会はどんどん契約社会化している。

もちろん、実際に自我を確立している者など少数派に過ぎないのだが、社会は、自我の確立を前提として、そのシステムを形成している。それが近代化の宿命であり、近代化とは結局、自我の確立を、社会全体が目指すことに他ならないのである。

ヨーロッパの近代化が始まってから五百年ぐらいにはなろうか。その間、人間は熟さずとも、社会は、その歴史の積み重ねによって、ずいぶん成熟してきた。つまり、自我の確立的な社会となってきた。

それだけに、いまや教育の中期に位置する（＝共同体、社会に適応する）だけで、かなり自我の確立に近づける時代と言えるかもしれない。それが擬似的なものであることは否めないまでも、たしかに時代は進歩したのだろう。

ついでに言っておくと、男女関係ですら、結婚となれば契約関係であり、当人同士の感情よりも、たった一枚の書面のほうが、今では、男女を拘束するのに力があるのである。ここに契約関係の"味気なさ"と"確実さ"が両方ともよく表れている。

上下シンメトリーの折り返し地点

さて、自我の確立段階は、人間の体で例えると、まさに"ヘソ"にあたる。つまり体の中心点にあたる訳だ。そして、混在的一者のところで述べたように、錬金術の根本経典である『エメラルド板』には、

「一なるものの奇跡を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上にあるものの如く、上にあるものは下にあるものの如し」という言葉が書かれている。

これは換言すれば「上下の中心線を折り目にして、そこからシンメトリー構図が描かれることになる」ということだ。

そして、ヘルメスの杖の中で、その折り目はどこかと探していけば、どうしても「自我の確立段階」に導かれることになる。言い方を変えれば「ヘルメスの杖は、自我の確立段階を中心線にして、上下にシンメトリー構図を描く」ということだ。

ここに私の恣意はない。これは結果的にそうなったのであって、私にとっても、ヘルメスの杖という哲学、神学を形成する前から予期できた訳ではないのだ。

私の思惑など関係なしに、ヘルメスの杖は、自我の確立段階を折り目にする、見事に上下対照の構図を描く。教育の段階はアルベド侵入に、混在的一者はアルベド（総合的一者）に、ニグレド（虚無）はルベド（虚無からの存在の創造）に、それぞれ重なり合う。

まだ説明していない言葉も出したが、今は何となく座標図を眺めて、それぞれ言葉の座標位置を確認していただければ十分だ。その上で、この美しいまでの上下シンメトリーを胸に刻んで頂きたい。言うなれば、これは神の肢体なのだから。

本当に不思議なことだが、自我の確立段階以外、他のいかなる座標を折り目にしても、このようなシンメトリーは描かれない。それだけに私などは「自我というものは、本当に大切なものなんだなあ」としみじみ感じ入ってしまう。

普段、アルベドだのルベドだのを中心にしてもものを考えていると、どうしても自我の確立などは等閑になってしまうのだが、その実、ここが神の体の中心（ヘソ）となるのだから、その重要性を、再認識せざるを得ないのである。

似て非なる上下の内容物

シンメトリーであるからには、向きを合わせれば、上下にある図は同じ形となる。

しかし、上下の対照物は、似てはいても同一ではない。似て非なるものである。たとえば「教育の段階は、外的客観からの主体への干渉」だが「アルベド侵入は、内的客観からの主体への干渉である」というように。

あるいは、器の形は似ていても、中に入っているものは別といったところか。

譬えるなら、混在的一者のコップに入っているのは水、アルベドのコップに入っているのは雲。ニグレドの皿に乗っているのは炭、ルベドの皿に乗っているのはダイヤモンドである。

水と雲（蒸気）は同じ分子の相転移でしかないし、炭とダイヤモンドは同じ元素の結合の仕方の違いに過ぎない。しかし両者の働きや価値の違いには雲泥の差があるだろう。

ヘルメスの杖におけるシンメトリーにも、これと同じような「同一性」と「価値の違い」が現れることになる。その内実を理解するためには、このさきの論述に付き合ってくださいしかあるまい。

第三部 分化から総合へ

分化の極みから総合へ

混在→分化

アルベド侵入について語る前に、その序文として「混在→分化→総合」について概論的な話をしておこう。

アンドレーア・アロマティコは、その著『錬金術』（種村季弘監修）で、錬金作業を次のように要約している。

まずカオス状態にある物質を手に入れ、それを純化し（中略）物質を形作っているさまざまな要素を分離し、分類してから、もう一度調和のとれた形で統一し直さなければならない。これが物質を賢者の石に変える霊的作業である。

カオス状態にある物質とは、やや具体的に言えば、熱したドロドロのペーストのことであり、本書においては「混在的一者」にあたる。すなわち母と子の未分化（＝カオス）状態であり、女性原理（結びつけること）のマックス状態である。

それが男性原理の侵入（父親の登場＝教育の初期）によって分化しはじめ、教育の中期、後期を経て、ついに自我の確立段階にいたる。そうして上記の「さまざまな要素を分離し、分類して」というくだりが実現されるのだ。

それは、まさに男性原理の優越による"分化の極み"であり、このことが「二元性」という言葉によってメルクマールの的に表現される。

分化→総合

次なる課題は「分類してから、もう一度調和のとれた形で統一し直す」ことであるが、その取り組みが進展していく姿が、アルベド侵入の、初期、中期、後期、であり、その完全な実現が、座標9のアルベド（アルベド自体）である。

アルベドは――上下シンメトリーを描くところの――混在的一者と同様に、女性原理、母性原理のマックス状態であり、そのため、離れていたものを、もう一度ひとつに結びつけずにはおかない。

つまり、混在的一者において、母と子を心理的に一者化していた女性原理の"結びつける"力が――自我の確立段階での潜在化を経て――アルベドにおいて、ふたたび力を取り戻すのである。

したがって、そこでは"女性原理により"分離していたものが再統一されるのであるが、混在的一者のときとは異なり、この場合、結び付けられるべき各要素が、かつての母子におけるそれよりも、ずっと整然と分離、分類されている。

それはまったく当然のことで、自我の確立段階における個性（主体が主体である根拠となる、共同体との異質性）を、乳幼児のあいまいで未分化な意識とを比べたら、その分化の度合いは、もはや比較にならないくらい異なっているだろう。

そうした材料（自我）を"適材適所的に"結び付けたときに現れる様相は、もう「混在」とは絶対に言えない。

それはまさに「調和のとれた形での統一」であり、それゆえ"総合"と呼んで然るべきものである。これが、私がアルベドを「総合的一者」とも呼ぶゆえんである。

心の中の客観

私たちは、自分の心のことを"主観"と呼ぶことがある。それは「私だけの物の観方」ということだから、たしかに"私の心"に近い概念だ。

だが私たちは客観性も持たなければならない。客観性を欠いた——それゆえ私情に流されることの多い——人間は、そのとき社会（＝客観的世界）側から、「あなたは社会的公平さを欠く」と批判され、ペナルティを与えられて、その場からアッサリと除外されるだけだからだ。

もとより人間は、社会的な生き物である。だから私たちは、心を外側に向ける。そして、その「どうにも自分の思い通りにならない客観的な世界」から、それでもなお、そこで生きるための"共同体のルール"を学ぼうとするのである。

ということは、簡単にまとめると「心の内側には主観があり、心の外側には客観的世界がある」。そして「客観的世界を知るためには、私たちは、心を、自分の外側に向けなければならない」ということになる。

しかし、自我の確立を経て「アルベド侵入の起点」に立ったとき、そのような常識的な考えは、すぐに破られずにはおかない。すなわち彼は、自分の"心の中に"自分の意志ではコントロールすることのできない「客観的な世界」が厳然と存在しているということを、そのとき思い知らされるのである。

それは実に不思議なことだ。自分の心の中には"主観"だけがあると思っていたのに、実際には、そこに"客観"までもがある。心の外側にしかないと思っていた"客観"が、心の中にもある。そういう事になるからだ。これは一体どういうことだろうか。

自分が自分ではない感覚

そのとき主体の身に降りかかってくるのは「自分がこうしたいから、こうする」という当然の行動形式ではなく、

「自分では思いもしなかったことが、たしかに自分の手によって為される」という不可解な行動形式である。

それは"自分が自分でない"感覚をもたらす現象であり、もっと言えば"自分が、何者かに取り憑かれている"かのような感覚をもたらす現象である。それゆえ彼は、この時、「どうして自分に、こんなことが出来たんだろう」と、狐につままれたような表情で、独りごちざるを得ない。

もっとも、それまでの彼――アルベド侵入の起点に立つ前の、自我の確立から前の段階にいる主体――であっても、失敗やアウト・オブ・コントロールとしての「自分では思いもしなかった事をしてしまう」ことはあっただろう。

だが、それは心理学者のフロイトが、100年以上も前に立てた個人的無意識の学説によって説明できることであり、そこに不思議なことは何もないと言っていい。少なくとも、主体の能力の範囲内の出来事ではない。

それに対して「アルベド侵入の起点」から起こり始まる「心の中の客観によって引き起こされる、主体の与り知らぬ現象」は、「自分で行うことが"自分の能力限界を超えて"優れた結果を出す」という摩訶不思議さを備えているのである。

アルベド侵入の起点というジレンマ

自我の確立とは、人間が自主的に為しうる自己規定、認識、倫理の上限である。それゆえ主体は、いかなる自主的努力によっても、これ以上の意識のステージに登ることは出来ない。

しかし、自我の確立段階において、人間は人間のままである。

序章で述べたように、「ヘルメスの杖」は、いわば「人間の地平と、神の視座をむすぶ梯子」であり、すべての人間は、神の視座にいたるまで、この梯子を登りきる義務を負っている。だから、主体の成長の描写が、こんなところでストップする訳はないのだ。当然のように主体は、新しい意識のステージに向かって梯子を登ってゆく。

そう、主体が「自我の確立」に到ったとしても、彼には、さらなる成長の過程が与えられなければならない。与えられなければならない.....けれども、彼には、自主的に自分を成長させる手立てはない。その自主性の限界が「自我の確立」の段階だったのだから。

これが「アルベド侵入の起点」となる状態である。

それは一つのジレンマ（迷い）であり、アンチノミー（二律背反）である。

アルベド侵入という解決

そして、このジレンマやアンチノミーを解決するものこそが「アルベド侵入」なのだ。このアルベド侵入こそが、「自主性の限界に立ったことで、成長の手足をもがれてしまった主体」のもとに"主体の内部から""内的客観として"力を与え、彼の成長にとっての助け舟を出してくれるのである。

もしかしたら「侵入」という言葉に抵抗を感じる方もあるかもしれないが、私がこの言葉を使ったのは、アルベド侵入の具体的な現れが、いわゆるインスピレーション（靈感、閃き）であり、そのインスピレーションの原意が「吹き込まれたもの」、つまり主体にとっては、何者からの侵入に他ならないからなのである。

では、何が主体の心（自我）に侵入してくるのだろうか。その答えは「アルベド侵入」という言葉のうちに、すでに示されている。つまり主体の心に侵入してくるのは「アルベド」なのである。

テリトリーを持つアルベド

アルベドそのものについては、座標9の節で、ある程度掘り下げる。ある程度、というのは、この『ヘルメスの杖』自体が、私の神学にとって、ダイジェスト版、簡略版の意味合いを持っているからである。

だから、ここでは、もともと簡略にしか表現しないつもりのことを、さらに簡略して表現することになるが、そうした意図のもとにアルベドを言い表すと、それは「無限、永遠、救済」ということになる。

無限、永遠、救済——それは多くの宗教にとっての奥義であり、ほとんど神そのものと言って差支えないものである。そして私が「アルベド侵入」と言うとき、それほどにも偉大なものが、主体の心へと侵入してくる事を意味しているのである。

ただしアルベドは"そこでしか純粋に自分を保つことができない"テリトリー（縄張り）のようなものを持っている。座標9が、まさにそのテリトリーだ。このテリトリーにいない限り、アルベドはその純粋性を保てない。

そして、アルベド侵入の受け手である主体は、当然、この座標9にはいない（＝その座標に意

識を定位していない)。だからアルベドは、アルベド侵入として働くときには、自分のテリトリーから出ていかざるを得ないのである。

ということは、アルベド侵入としてのアルベドの内容は、その純粋性を低減していることになる。そのとき「無限、永遠、救済」は、もはや「無限的なもの、永遠的なもの、救済的なもの」に過ぎない、ということだ。

たとえて言うと、アルベドが「本人」であるならば、アルベド侵入の後期ぐらいで「弟」、中期ぐらいで「子」。アルベド侵入の初期では「孫」ぐらいにしか、その血の濃さを残していないのである。

内なるアルベド侵入、外なるカリスマ的影響力

「分化から総合へ」のところで書いたことだが、アルベドは女性原理のマックス状態であり、それゆえ、いわばアルベドからの使者である「アルベド侵入」もまた、基本的に、女性原理の「結びつけること」を責務としている。

そして、自我の確立によって分化（他要素との分離）した主体は、アルベド侵入によって総合（分化した要素の結びつき）への階段を上ることになる。他方、主体の、その内的営為は、そのまま外部展開をもして、彼の周囲にも大きな影響を与えることになる。

というのも、アルベド侵入は、一種の"神からの恩寵（カリスマ）"であり、その恩寵を受けている主体は、外部の人間から見ると"カリスマ的人物"として目に映るのである。

カリスマ的人物となった主体は、その影響力（指導力）によって、人々（自我を確立している人間たち）を自分に引き寄せ—引き寄せることで結びつけ—彼らを総合への道筋へと導くことになる。まさに主体内部のアルベド侵入が、主体外部において"カリスマ的影響"として展開されるのである。

そして、そのカリスマ的影響を、主体の周囲にいる自我確立者が受けたとすれば、そこには、また新規のアルベド侵入が生じる可能性が出てくる。つまり、彼（他者）が受けたカリスマ的影響力という"外なるもの"が、その彼の心のなかで"内部展開"され、ついには彼にとっての、アルベド侵入となる"可能性がある"のである。

感動を与えられ、感動を与える

カリスマ性は、もちろん、アルベド侵入の、初期、中期、後期、という段階を登るほどに、その影響力を増していく。そして、政治、芸術、学問、宗教、といった各分野で、そのカリスマ性を波及させていくのである。

もう少し具体的に言うならば、このカリスマ性とは、要するに「感動」である。

内なるアルベド侵入としては「神からの恩寵として、自分を超越する力を与えられるさいの感動」であり、外なるカリスマ的影響力としては「接する人々に、彼が"孤独を癒す感動"を与える力」である。

そう、彼は、ほとんど離散している（＝契約関係でのみ、かろうじて結びついている）自我保持者たちの寂しさや虚しさを、自身が与える感動によって解消する。そして、その偉業によって、多くの人たちから「天才」と讃えられることになるのである。

そこで私は「アルベド侵入」の初期、中期、後期、の説明の中で、まず主体内部で起こる「主体にとって感動的に思える、恩寵的な出来事」を描写し、その次に、その恩寵が外部展開をしたときの「カリスマ的影響力の事例」を紹介していこうと思う。

そのさい、なるべく読者が直接触れることが出来る"感動"を紹介したいので、私は、既存の芸術作品に言及することが多くなるだろう。そういった作品ならば、本やディスク、画集等を購入してもらえさえすれば、読者の眼前に実例を差し出すことも可能だからだ。

そして、実際に、その芸術作品によって、読者の中に"感動"が生じたならば、私にとっても非常に嬉しいことである。

柔らかい心の自我確立者

では本題に入るとしよう。まずは主体内部の恩寵的体験について――

自我を確立した主体が、その心を「度を超した自己肯定」「狭量でガチガチの合理性」「他人を責めるのに多くのエネルギーを使うような良識」などに偏執させない場合、主体にアルベド侵入が恵まれることになる。

皮肉であるが、自我の確立は――アルベド侵入が起こる前提であるにも関わらず――上記のそうした、ある意味で"お堅い人間"を作らずにられない。しかし、アルベド侵入に恵まれることを望むならば、大切なのは、柔らかい心を失わないことである。

契約を超えた他人への優しい眼差し、非合理的なものへの関心、悪なるものが決して自分のうちから消えさることはないという自覚、そうしたものが"柔らかい心"の材料となる。

そんな"柔らかい心を持っている"自我の確立者が、自分の仕事を果たしているとき、フッと心と体が軽くなり、妙に仕事がスムーズに進んでいくことがある。

仕事といっても、計算的なデスクワークや、単調な肉体労働を指しているのではない。

いや、そういう仕事でも起こり得るのかもしれないが、ここで言う仕事とは、大体において、その人にとって天来の才能を発揮できる、いわゆる天職を指しているのである。それはむしろ、

スポーツや趣味、学問や社会貢献でも構わない。

そうした天職に励んでいるとき「心身が軽くなって、仕事が不思議なぐらいはかどる」。しかも「そのときの仕事のクオリティが、普段の自分からは想像もつかないぐらい高い」。そういうことが起こることがある。

他人事な感覚

そうした場面で主体が感じるのは、
「どうして自分に、こんなことが出来たんだろう」「これは自分がやったことなのか」「なぜ自分が、この勝負で勝てたんだろう」といった"他人事な感覚"である。

まるで自分が自分でないような感じであり、かつ、自分よりも"優れた者"に意識が取って代わられたような感じである。

ただし、その感覚はいつでも過去形でしか言い表せず、現在進行形では、むしろ心が静かで、眼前のものが非常に明晰に、クリアーに見えることも多い。

つまり、そのとき"集中している"と言われれば、たしかに、ものすごく集中しているのだ。集中が途切れていれば、目の前のものは、逆に、ぼやけて見えるのだから。そして、集中と個性（＝自我＝自分が自分であるという意識）は切り離すことが出来ないものである。

ただ、ふと気づいてみれば――その事態が過去形になったとき――かの時の自分が、いつもの自分ではないような気がするのである。

どうして、そのような感覚に襲われるのか。

仮に、人格的に表現するならば、そのとき主体は、アルベド侵入（その初期だから、アルベドの孫的存在）に憑依され、ある程度、人格交代させられているのである。この人格交代が、主体には"意識の変化"として感じられる。

意識の占有率で言えば、主がアルベド侵入であり、従が主体の自我である。明らかに強制性がある。だからこそ、この現象にはアルベド"侵入"という表記が相応しい。侵入という言葉には、まさしく強制性があるからだ。

ただし、この段階における主体の実感としては"人格"交代などという具体性は寸毫もなく、もっ

とずっと抽象的な「何かすぐれた、ぼんやりした力」が、自分のところに来ている、といった感じしかない。

アルベド侵入の初期の例

この段階をよく示しているのが、いわゆる「禅の悟り」ではないだろうか。

とくに道元が開いた曹洞宗では、その自力本願によって、徹底的に"自分"が追及され、ついに自我の確立を果たすことになる。禅定へのひたすらな集中（只管打座）と、何事も他人任せにしない自主性が、それを成就させる。

しかし、この宗派にとって最も大切な悟りは、自我の確立ではなく、その自我の確立を果たしたあとに訪れる、因果の流れを断ち切るような"不思議な瞬間"なのである。

つまり、自我を確立した修行者だからこそ味わえる、身心脱落の瞬間（心と体が軽くなり、自我が主従の従に回る場面）に、その悟りが現れるのだ。自我の確立以上の真理である、アルベド侵入の悟りが。まさに"因果性を超えているので、合理的には、人に説明することが出来ない"「不立文字」の悟りが。

これら、身心脱落や不立文字は、紛れもない禅の用語である。ここにはアルベド侵入の匂いが立ち込めている。

ブラームスの音楽（カリスマ的影響力の事例）

アルベド侵入の外部展開である、カリスマ的影響力の事例として、ブラームスの音楽を挙げておこう。もちろんアルベド侵入の"初期"の事例である。

ドイツの三大Bの一人に数えられる（あと二人は、バッハとベートーヴェン）ブラームスの音楽は、一音一音を揺るがさない、楽譜の隅々にまで自己意志を浸透させた、非常に自我的なものである。あまつさえ彼は、

「音楽としての魅力を求めることよりも、まずは楽曲の完成度を高めることを優先するべきだ」といった事を言っているから、きっと、かなりガチガチの自我確立者なのだろう。

ところが、そのような"お堅い"音楽の途中で、急にブワッと"憧れ"の感情が侵入してくることがある。あるとき驚くほど切ない、美しい旋律が溢れてくるのだ。この瞬間がブラームス・ファンにはたまらないのだが、このような旋律について、ブラームス自身の告白をつむいだ、実に興味

ぶかい文章がある。

美しい主題は「一瞬のひらめき」として訪れ、時には紙に書きとめる間もなく「すぐに消えてしまう」とブラームスは語っている。

「私の音楽の中でいつまでも生き残る主題はどれもそのようにして生まれたものだ」

ブラームス『弦楽五重奏曲、第1、2番』ジュリアード弦楽四重奏団（ソニークラシカル）、ライナーノーツより

一瞬のひらめき、インスピレーションは、まさにアルベド侵入の"具体的現象"である。ならば、その美しい憧れの旋律は、実際にアルベド侵入によって生まれたものだろう。

また、音楽の構造そのものが、自我の確立とアルベド侵入との関係を示す、いいモデルになっているのだから、ブラームスが、この段階（アルベド侵入の初期）で仕事をしているのは間違いないだろうと思う。

アルベド侵入との共生

アルベド侵入の中期を特徴づけるのは「順応とスランプ」である。

初期においてアルベド侵入は、主体に「自分を戸惑わせる不思議なもの」、「たまにしか巡ってこない稀有なもの」といった印象を与えずにはおかなかった。

が、中期におけるアルベド侵入は、主体にとって、もはや"不思議なもの"でも"稀有なもの"でもなくなっており、むしろ日常的に現れる、当然のことになっている。

インスピレーションにしても、驚きのうちに恵まれるというよりは「仕事に集中することで、それを呼び込む」といったスタイルになっており、実際「自分が呼び込めば現れるはずだ」と思えるぐらいの自信はついている。となれば、アルベド侵入に関して、それなしの自分を想定することのほうが、よほど難しくなっていることだろう。

つまり主体は、アルベド侵入という現象に順応しているのだ。

そのような状況に驚いたり、当然のこととっていないのは、主体ではなく"周囲の人々"である。彼らは、主体の仕事のクオリティの高さや、その人間離れした魅力に、目を瞠らざるを得ない。彼らは呆気にとられて言うだろう、「ここに一人の天才が現れたのだ」と。

事実、天才と呼ばれる人たちを形成するのは、アルベド侵入という力に他ならない。天才という言葉の定義には、色んなものがあるだろうが、何よりも「アルベド侵入と共存している」ということが、第一義としての"天才の定義"なのである。

アルベド侵入の中期にある主体は、かの偉大なる力と共生している。そして、その力と共にあるときには、宗教的ともいえるべき至福を感じている。

天才モーツアルト

そうしたアルベド侵入の中期の体現者、すなわち"天才"として真っ先に思い浮かぶのが、音楽家のモーツアルトである。彼がアルベド侵入を受けていたことは、まず間違いないところで、それ

をモーツァルト自身も自覚していたようだ。

彼の妻コンスタンツェには、ゾフィーという妹がいて、彼女が晩年のモーツァルトの、その"アルペド侵入を受けているところ"の様子を書き残してくれている。

「そんなときの彼は、混乱した脈絡のない話し方をしたばかりでなく、ときとして、普段は聞きなれぬたぐいの冗談を口にした。それどころか故意になりふりかまわぬ挙動を見せさえした。しかしそのさい、考えこんだり思いをめぐらしたりしている事柄は、なにひとつないように見えた」

少々分りづらい文章だが、ここには、モーツァルトの「普段と違っている様子」と「考え込んだりしなくとも仕事が進んでいく様子」が確かに描かれている。

そして、そうした状態で書いたと思われる作品に『第二ハフナー・セレナード』があるのだが、これに関して面白い文章があるので紹介したい。

モーツァルトはこの曲を、父親にせかれて非常な早さで作り、作るそばから故郷に送った。それから数か月たって、戻ってきた自分の作品を見て、こう書いている。

「新しい《ハフナー・シンフォニー（＝第二ハフナー・セレナード）》には全く驚きました。言葉を失うばかりでした。この曲はすばらしい効果を発揮するでしょう」

あの抜群の記憶力を持つモーツァルトが、わずか数か月前に自分の書いた作品を覚えていないのだ。彼はこれを書いている時に、本当に我を忘れていたに違いない。

井上太郎『わが友モーツァルト』より

このようにモーツァルトは、創作時のことが記憶にも残らなかった作品を激賞し、あまつさえ、それが「聴衆に対してすばらしい効果を発揮するでしょう」などと断言している。

私がこの文章を最初に読んだのは学生時代だったが、

（忘れてられる作品がすばらしい？）

と、この点をずいぶん不可解に思ったものだ。

覚えていない作品だからこそ

しかし、今ならば事情が分かる。

つまりこうだ。モーツアルトは、かつて自分が「第二ハフナー・セレナード」を作曲していたとき、そこに「記憶をする主体である"自分"がいなかった」ことを思い出した。あるいは「いなかったのだろう」と――それに類することは、日常的に起きているので――ほぼ確信に近い推定を下したのだ。

実際に彼は、そのとき、アルベド侵入に自分の体を明け渡していたはずだ。

もっと分りやすく言えば、その時のモーツアルトの肉体にあって、モーツアルトの自我は、ほとんどお留守の状態だった。それだから彼は、後日、自分が書いたはずの楽譜を見ても、作曲時のことを、まるで思い出すことが出来なかったのだ。

結局「第二ハフナー・セレナード」を作曲したのは、モーツアルトの自我を押しつけた、アルベド侵入の力であった。

そして、であるならば――初期の冒頭で語ったとおり――その内的恩寵（アルベド侵入）は、必ずや、外的なカリスマ性に転換されるはずである。つまり、そうやって作った曲に、"カリスマ的な求心力"が備わるということだ。

だからこそ、モーツアルトは聴衆に対する、その曲の影響力、効果を確認せずにはいられなかったし、事実、第二ハフナー・セレナードの改作である『ハフナー・シンフォニー』は大いに聴衆の心を掴んだのである。

もっとも、モーツアルトによる「アルベド侵入的創作」の結実は、ハフナー・シンフォニーに限らない。彼の創作態度から言って、むしろ、その創作の大部分がアルベド侵入によるものだと言っても良いのではないか。

まことに、アルベド侵入は、つねにモーツアルトの傍らにあった。そして彼は、35年という短い人生を、インスピレーションの泉が枯れる前に――つまり本格的なスランプが訪れる前に――疾風のような速筆とともに駆け抜けてしまったのだ。

そんなモーツアルトが書き上げた作品数は、600を超えている。そして、その中の多くが、カリスマ的影響力を備えているのである。

深刻なスランプ

モーツアルトは、そのように、スランプが来る前に"勝ち逃げ"の人生を終えたが（それは別に、彼の生活が安楽だったことを意味する訳ではない）、一般的な寿命を送る者にとっては、ことアルベド侵入に関して、そのような「勝ち逃げの人生を生ききる」ことは難しい。

ほとんどの場合「アルベド侵入の中期」の宿命として、主体のもとにスランプが訪れる。その理由は次のごとくだ。

アルベド侵入の中期にある主体は、たいがい「ある一つの分野における天才」である。今述べた音楽家のモーツァルトや、画家のルノワール、文学のロマン・ロラン、哲学者のショーペンハウエルなど、天才には"何々の"天才という言い方がなされる。それは、自我の確立段階における、専門分化の名残かもしれない。

そして天才である主体が、その、限られた"ある分野"で、ルーティン・ワーク（繰り返される日課）を続けていくと、どうしても、彼の心から緊張感が失われてしまう。つまり気が緩み、さらには仕事に"倦み、飽きる"わけだ。

こうなると、アルベド侵入は起こらなくなる。まず第一に「仕事に集中することで、アルベド侵入を呼び込む」ということが出来なくなるからだ。

だが、それだけではない。それ以外に「このときの主体の心象が、自我の確立段階よりさらに下の、だいたい教育の中期あたりに似てくる」ということが、アルベド侵入が起こらなくなる、第二の理由になる。

すなわち、アルベド侵入の中期と、教育の中期とは上下シンメトリーを描く位置関係にあるので、何らかの契機があると"相似性による転換"が起こりやすいのである。

アルベド侵入の中期における、アルベド侵入と共生するための"意識の穴"みたいなものが、いまや――形式的には相似している――教育の中期における"自律性の欠落"に転換される。つまり、主体の中で、かつての「同一化」や「手段化」が当たり前になってくる。そんな人格のもとに、アルベド侵入など訪れる訳もない。

その結果、主体は、アルベド侵入の導きを失ったことによる方向喪失感に陥って、たびたびメランコリーに襲われるようになる。自分のことばかりが可愛そうになり、やたら子供じみた言動をとるようになる。

翻弄される天才経験者

たしかに、こうなった主体は可哀そうだ。アルベド侵入に翻弄されて消耗している姿がそこにあるからである。そもそもアルベド侵入は、勝手にどこからか侵入してくるものであって、基本

的に主体は、これをつなぎとめる手段など持っていない。そう、主体には何をどうすることも出来ないのである。

こうしてアルベド侵入は、嘘のように主体のもとを去ってゆく。そして、かつての天才時代を思い出すほどに、主体の喪失感は止まることを知らない。

せめて彼に出来る唯一のことは、ふたたび自我を確立させて、もう一度自分を「アルベド侵入の起点」に置くことだ。が、すでに栄光を味わってしまった者に、はたして、そんな地味な"二度目の土台作り"が出来るものなのだろうか。

この深刻なスランプは、むしろ乗り越えられないまま"不遇な晩年"を形成することのほうが多い。つつい小室哲哉氏などが、このパターンの典型として思い浮かんでしまうのだが、彼が全盛期に華原朋美さんに提供した曲と"復活した"華原朋美さんに提供した曲とは、とても同日には語れない。そこに「アルベド侵入の臨在と喪失」との明暗がはっきりと表れていると言えるだろう。

ただし私は、世代的に、小室哲哉氏の全盛期を知っているし、彼の音楽はとても好きだった。それだけに、いまだに彼の復活を夢見てしまうのである。

スランプ克服の実例

とはいえ、この深刻なスランプを、見事に克服したケースもある。その実例を挙げるとすれば、ベートーヴェンこそ、それに最も相応しいだろう。

ベートーヴェンは、その創作の中期に、一般に「傑作の森」と呼ばれている、濃密なアルベド侵入の期間を経験している。交響曲の第3から6番。ピアノ協奏曲の第3、4番、ピアノ・ソナタの『ワルトシュタイン』『熱情』など、この頃の作品は、いずれもインスピレーションに富んでいてすばらしい。

ところが、傑作の森を通り過ぎたあたりから、ベートーヴェンのスランプがやってくる。作品数が減り、その作品の密度も薄くなっていく。

その薄さをごまかすために、ベートーヴェンの音楽は通俗的になった。すなわち、孤独な自我たちを呼び集めるのではなく、快さを求める聴衆たちに媚びるような音楽を作るようになったのである。

そうして通俗的になったからこそ、かえって周囲からは賞賛されてチャホヤされるようになった。そういう扱いに、ベートーヴェンも、決して悪い気はしなかつただろう。

しかし、この頃の第7交響曲は、楽しいけれども飽きの来やすい音楽であり、まさに通俗曲である、戦争交響曲『ウェリントンの勝利』などは、

「これが、あのベートーヴェンの作品なのか？」と疑いたくなるほど、中身がない。まさに虚ろな響きが聞こえてくる。当時の聴衆は喜んだが――何度でもディスクで音楽を聞け、その曲の真価を確かめられる――後世の私たちにとっては、確実に『ウェリントンの勝利』を作ったころのベートーヴェンはスランプである。

しかし、ベートーヴェンの特異性は、そのままスランプに吞まれて朽ちていくのではなく、ゼロから再構成するように、自分を鍛え直したところにある。この頃の手記に「毎日五時半から朝食まで勉強すること！」と書いてあるのだが、まるで必死に勉強をしている受験生のようにではないか。

そのおかげか、ベートーヴェンのもとには、ふたたび少しずつ、アルベド侵入の機会が与えられるようになった。スランプは克服されたのである。

ことに『ハンマークラヴィアのソナタ』『荘厳ミサ曲』『第九交響曲』などは、傑作の森の頃のベートーヴェンにも書きえなかった偉大さに満ちている。そこには、ほとんどアルベド侵入の後期のような響きさえ、鳴り渡っているのである。

専門家から、万能の天才へ

アルベド侵入の中期では——ごく簡略的に言う——マンネリズムが主体のテンションを下げ、それがスランプを呼び込んでしまう、という話をした。

しかし、このスランプの発生事情は、アルベド侵入の後期では、ものの見事に克服されてしまう。それは、アルベド侵入の中期では、まだスペシャリスト（専門家）としての色合いを残していた主体が、この段階においては、ゼネラリスト（多様な才能をもつ人）に変貌しているからである。

つまり主体の関心が多方面に拡張することによって、「ある分野に飽きたら次の、その分野にも飽きはじめたら、そのまた次へ」と興味の矛先が更新されるので、そもそもマンネリズムが生じない、という帰結に到るからだ。

しかも、その関心の拡大によって得られる、各分野での成果（たとえば作品）は、いわゆる"手の横好き"のレベルでは到底ない。ある分野に"関心が湧く"ほどの適性があるならば、このクラスの主体には、取り組みばすぐにアルベド侵入が与えられる。そして、あっという間に、その道の大家になってしまうのだ。

分りやすく言えば、彼は、万能の天才になってしまうのである。そんな主体に、「一つの分野で天才と呼ばれるだけでも羨ましいのに、どうして君にばかり、そんなに多くの才能が与えられるのだ？ 不公平ではないか」

などと言っても始まらない。実際には、そうやって関心と才能を多面化しているからこそ、彼はスランプに陥ることなく、ずっと天才をやっていられるのだからである。

宿題する子供の多才

ただし、この段階における主体は、べつに自分が「色んなことをやっている」と思っている訳ではない。周りからは当然そのように見えるわけだが、主体自身の感覚としては、むしろ「自分は一つのことをやっているに過ぎない」と思っているのである。

ちょっとした譬え話をしたい。

ここに宿題をしている子供がいるとする。

宿題をするために、その子は、まずランドセルを開け、ドリルを引きだし、ノートを引きだし、鉛筆を削り、消しゴムを用意し、ドリルを開き、ノートを開き、計算をし、答えを書き、時には消しゴムで数字を消す、のだとしよう。

そうした場合、その子供は、

「ランドセルを開ける才能」「ドリルを引きだす才能」「ノートを引きだす才能」「鉛筆を削る才能」「消しゴムを用意する才能」「ドリルを開く才能」「ノートを開く才能」「計算をする才能」「答えを書く才能」「消しゴムで数字を消す才能」
を持っている、という言い方が出来るはずである。

たしかに、言い回しとしては、まことに珍妙である。とはいえ、どれほど微細なものであったとしても、それは実際に、その子供が持っている多様な才能であり、才能を現実化した仕事能力でもあろう。

しかし、その子供自身は、自分を多様な才能の持ち主だと考えるだろうか。自分が、そのように多くの仕事をこなせる、マルチなタレント（才能）だと考えるだろうか。

おそらく「そんな馬鹿なことを考えるはずもない」というのが答えだろう。

その子は、きっとこう思うはずである。自分がやっていることは、単に「宿題をする」という"一つ"のことである、と。

オペラを作るという一つのこと

次に、オペラというものを、例にとってみたい。

このオペラを作るためには、まず文学的な台本を書いて、それにメロディーをつけ、メロディーに和声をつけ、それを楽譜に書く必要がある。

また、それは演劇でもある訳だから、舞台の大道具を作り、小道具をつくり、衣装を用意しなければならない。もしかしたら劇場を立てる必要もあるかもしれない。スポンサーを探したり、スケジュールを調整する必要もある。

あとは上演当日の、オーケストラ指揮もしなくてはならないだろう。

これら多くの役割を果たすには、当然、各分野で活躍できる才人たちの結集が必要である。

まず文学的な才能を持った人が必要だし、作曲の才能を持った人も必要。絵を描く才能、大道具、小道具を造形する才能、建築の才能、そういった才能を持っている人も、それぞれ必要になる。マネジメントの才能、指揮者としての才能を持った人も必要だ。

こうした、多くの才人の結集が、オペラの上演には必要なことになる。

しかし、これらの事を、ひとりで出来る、万能型の天才がいたらどうだろう。いちおう音楽の世界では「作曲家」として名が通っている、ワーグナーなどは、わりとそれに近い才能を持っているのだが。

客観的に見て「多なる人」

せっかくなので、上記の条件を満たしている万能型天才を、仮に「ワーグナー」と名付けておこう。

そうすると、そのときワーグナーも――かの「自分は、宿題という一つの事をしているに過ぎない」と言った子供と同様に――「自分は、オペラを作るという一つの事をしているに過ぎない」と言うかもしれない。

しかし、ここまで一つ一つの作業内容が高度化すると、彼が多様な才能を持っている人であること（＝一人の人物のうちに、多なる才能が含まれていること）が、客観的にみても真実になる。

たしかに構造的には、子供の宿題の時と変わらない。

とはいえ、ここでは、主体が内在させている「才能、能力、エネルギー」が、ある一定の水準を超えて大きくなっている。小学生の宿題と比べれば、もう百万倍ぐらい、質と量とが規模拡大していると言えるだろう。

そうなると、「一と多の関係性」の規模と充実度もまた、一般の人々では、その全体像が捉えきれないぐらいに、巨大なものになってしまう。

つまり周りからすれば――彼の才能の一つ一つは見る事が出来るのだが――その多数の才能を「一つのもの」として総括している意識となると、これを一望するには、あまりにも大きすぎる事になってしまうのだ。つまり対象が大きすぎて、一般人の視野には、到底入りきらなくなってしまう。

そして、そうやって「一なるもの」が見えないとき、周囲にとってのワーグナーは、ただの「多芸多才のすごい人」にしかならないことになる。

満たされれば供給はなくなる

だが、それと同じとき、ワーグナー自身は、自分がいくつもの才能を持っていることや、自分がいくつもの役割を果たしていることを、「俺はすごい」と言って誇るだろうか。

もし誇って調子に乗るようならば、彼はもう、素晴らしいオペラを創ることは出来なくなるだろう。というのも、そのような自惚れがあるところに、アルベド侵入は再供給されないからだ。

つまり、自惚れがあるということは、主体が、「この俺にあっては、何の助け（＝アルベド侵入）がなくとも、能力が満たされているんだ」と、天に申告しているようなものなのである。

そんな申告を受けたアルベド侵入は、すぐに「では、わが助けは必要なしだな」と了承して、その主体から離れてしまう。結果アルベド侵入も供給されなくなる。

だが反対に彼が、「私は、ただ一つのこと。ただ"オペラを創る"ということしかしていない」と告白するならば、そこに自惚れは生まれまいだろう。人が何か一つのことをする、というのは、ごくごく当たり前の仕事でしかないからだ。

よって、アルベド侵入との縁が切れることもない。彼はこれからも、その「後期」に見合った膨大なアルベド侵入を背景にして、さらに偉大な仕事を成し遂げるだろう。

多を一つに感じること

ここまで見ると、ことわざの「天は二物を与えない」という言葉は、文字通りの真実なのだと分かるだろう。

二物とは、要するに複数のことであり、多なるものである。

その多を多として感じるところに、天の力は恵まれない。すなわちアルベド侵入は起こらない。前述したとおり、主体が「多なるものを持っている自分はスゴイ」などと思ってしまう、そこから慢心が生まれるからである。

しかし、多を一つとして感じるところには、天の恵みが与えられ、そこにアルベド侵入が起こる。そこには平静と謙虚とがあるからである。

実をいうと、この「多を一つに感じる」ことは、アルベド侵入の段階を終えて、アルベド自体に参入するための、いわば最終課題なのである。

というのも、アルベドでは——多とてなく——、無限を一つのものとして感じる必要があるからだ。むろん"その時には"無限を総括できるだけのエネルギーが主体に供給されるのではあるが、その「構造」だけは、事前準備として、理解、体得しておかなければならない。

だが、それはもちろん、簡単に体得できることではない。やはり、その前の段階において、一定期間は、それと似たようなことを、実地に体験しておく必要があるのだ。

それこそが万能型天才の自己認識であり、多方面の才能を、ただ一つの才能として受け入れる——平静さと謙虚さを伴った——後期特有のアルベド侵入なのである。

アルベド侵入の後期の例

アルベド侵入の後期の例だが、万能の天才と言え、やはりレオナルド・ダ・ヴィンチが真っ先に浮かんでくるだろう。

彼の「自然科学者としての才能」が、とりわけ注目される昨今だが、私の場合、まずはやはり「画家としてのレオナルド」が浮かんでくる。『モナ・リザ』や『洗礼者ヨハネ』など、彼の傑作にやどる"天才の凄味"には、おそらくミケランジェロですら叶わないのではないか。

そのミケランジェロもまた「彫刻家、兼、画家」であり、文学の才能も持っていた人であった。まさにルネサンス期の万能人間の一人と言えようし、彼の天才性は、人々からは「神のごときミケランジェロ」と讃えられた。

万能の天才、万能人間——我が国であれば、弘法大師空海がこれにあたるだろう。僧として、建築家として、著述家として、空海の才能のまえに、可ならざるものはない。

再び西洋に目を向ければ、文学者のゲーテが、ワイマール公国の宰相として働き、自然科学者としても『色彩論』などの著作を残している。彼は絵も上手だった人だ。ゲーテは本気で、自分が画家になるか、作家になるかを迷ったという。

私には、彼らが、何をもって自分の才能を「一つのもの」と総括していたかが分からない。そのため、どうしても「多才な人」として、彼らを描出するしかないのが、ここでの実情である。しかし実際には、彼らは、自分は何らかの——名付けられないかもしれないが——「ある一つの事

をしているだけだ」と思っていたに違いない。

内側からの多面化

ところで、彼らのように「多分野を万能的に開拓する」以外にも、「一つの分野を内側から多面化する」という形でも、仕事のマンネリ化を克服することが出来る。それは、どちらが上とも下とも言えない、単なる"スタイルの違い"の問題である。

たとえば、彼が画家ならば、あらゆるモチーフに取り組めばよいし、彼が音楽家ならば、あらゆる技法を駆使して名曲を生み続ければよいのだ。

その音楽家ならば、たとえばハイドンなどがその典型だろう。ハイドンは104曲もの交響曲を書いているが、聴けば聴くほど、その多くの曲が「あまり似ているところがない」ことに気づかされる。とくに『ザロモン・セット』と呼ばれている、後期12曲のセットなどは、多様性と天才性が、驚くほどの充実感を生み出している。

画家ならばレンブラントか。彼の絵は、みな似ていると言えれば似ているが、なぜか何枚並べられても飽きが来ない。色々描いていても、なぜかすぐに見ていて飽きてしまう、シャガールなどは雲泥の差だ。

レンブラントには、言葉では説明できないほどの、精妙な多様性があるのだろうし、それを支えているのが、きわめて高度な天才性なのは疑いようもない。

アルベド自体の寸前

アルベド侵入の後期にまで至った主体には、ついに「アルベド自体」の体験に恵まれる"可能性"が与えられる。アルベド侵入と同様に、内的客観からの一方的な恩恵であるため、それが体験できるという保証は出せない。これは徹底して受動的な体験であり、そのため保証できるのは、あくまでも体験の"可能性"だけなのである。

しかも、アルベド自体の体験は、アルベド侵入の体験と、直接的には連結していない。上流から下流に向かって拡大していく川幅が、その拡大の極みで海に連結される、といった順当な進展は、ここにはない。

この場面で働くのは、大いなる逆説である。まさにパラドックスに満ちた「恩寵の原理」によって、アルベド侵入の後期にある主体は、アルベド自体と結ばれるのである。

そして、その恩寵の原理を理解するために、私たちは一度「自我の確立」の段階まで立ち戻って、そこで"根源苦"を観察しなければならない。

根源苦について

誰しも、人生に苦しみがついて回るのは当選のことである。それならば、自我の確立者が苦しみを抱くのもまた当然である。

しかし、自我の確立を果たした主体が味わう苦しみは、一味違う。それは、それまでの教育の段階ではオブラートに包まれていたのを剥がした、いわばむき出しの苦しみである。しかもそれは人類普遍的な苦しみであって、そのため「根源苦」の名に値する。

根源苦を空間的に言い表せば、それは「孤独」である。

それを主体の感情として表せば「寂しさ」となるだろう。教育の段階では、同一化や手段化によって、他人を自分のように錯覚することが出来たが、他人と二元的に、完全に分離した自我の寂しさに、誤魔化しは全く効かない。

だから彼は慟哭する、「誰もいない！」と。

つぎに時間的に根源苦を捉えるならば、それは「無常」である。

これを主体の感情として表せば「虚しさ」になる。すべてのものは、砂時計の砂のごとく過ぎ去り、手元に残せるものは何もない。若さも金も名誉もやがては消え去り、忘れられて輪郭を失っていく。この時の流れの確知は、ついに"死の予感"をも、彼の認識の内側へと送り込む。かかる死の予感は、虚しさの重要な一材料だ。

そして彼は、ついに嘆く、「何も残らない！」と。

最後に、倫理的な根源苦は「罪」である。

この罪の意識が、主体の心に何を呼び起こすかと言えば、それは「無価値感」であろう。「こんな自分など、いないほうがいいのではないか」という思い、「こんな自分など、いてはいけないのではないか」という思い、それが無価値感である。

その具体的な表現となるのが、ヨーロッパ的な、あるいはパウロ的な「罪の代償としての死」であるが、死はひとつの形式に過ぎない。

ともかく主体は、自分の無価値さを感じ、震えて言うだろう、「心許ない」と。

心許ない——あまり普通に使う言葉ではない。しかし、自分の存在に極度の頼りなさを感じている魂の、その言葉にならない不安を、あえて言葉にしたら、きっとそのような台詞になるだろう、ということである。

ニグレドの材料

以上「孤独—寂しさ」「無常—虚しさ」「罪—無価値感」という、自我が抱える根源苦について見てきた。

そして、この根源苦が"ニグレド"の材料になる。すなわち「恩寵の場面において、主体が想起する根源苦」、それがニグレドなのである。

アルベドの「白化」と対照的に、ニグレドとは、錬金術における「黒化」を意味している。黒化——この言葉は、ほかに腐敗とかメランコリー（憂鬱）、人生の暗く惨めな状態をも意味している。まさに根源苦に気持ちを占領されている主体そのものだ。

一般的に、小錬金術の過程は「ニグredo→アルベド」「黒化→白化」の順に進むと言われているが、私はこれまでニグredo（黒化）については言及しなかった。

それは、ニグredoがその本質と本領を現わすのが、まさに、この座標8,9の「恩寵の原理」であって、それ以外の場面においては、たとえニグredo的な暗い相が現れても、何のプラスの役割も果たさないからなのである。

しかし今はニグredoが役にたつ。恩寵の原理にあっては、このニグredoがアルベドを引き寄せるからだ。

ニグredoを体現できない者に、救済たるアルベドは訪れない。

すでに「アルベド侵入の起点」で触れたように、アルベドとは「無限、永遠」そして「救済」である。そして、このアルベドが訪れても、それを「救済」と感じられるだけの「前提となる、苦しみの自覚」が無かったならば、主体はその訪れに気づけないのである。

拡がりのない色

そして、もう一つ、読者にあっては、黒という色を「拡がりのない色」として認識していただきたい。

色彩論を学ばないかぎり出くわすことのない知識だが――黒以外の色は、実体以上の周囲への拡がりを持っており、これは色の「明度」に比例する。明度とは色の明るさの事であり、その色が最も個性を発揮するとき（鮮やかになるとき）には「黒、紫、青、緑、赤（緑と赤は同等）黄色、白」の順で、明度が上がっていく。

だから明るい黄色などは、実際の面積よりも、かなり大きく見える。

同じ意味で、囲碁の碁石なども、黒い方を大きく作ってやらないと、白いほうの側が、どうしても大きく見えてしまう。碁石は実は、そういう作り方をされているのだ。それは「白は拡がって見えるが、黒は色として広がらない」からである。

ゆえに黒は、その色で一個の点を描けば、ただそれだけの大きさとなる。黒（ニグredo）は、したがって、その黒で示された点があるときには、それが、周囲に延長がない「ただ純粋な一点」であることの指標となるのである。

はぎとられる幸福感

では「根源苦を想起している状態がニグレドである」「ニグレド的な黒い点は、延長をもたない、ただ純粋な一点である」という二点を前提にして、これから恩寵の場面を見ていくことにしよう。

さて、アルベド侵入が起こっている現場というのは、主体にとって、この世離れした幸せを感じずにはいられない時間である。大きなものつつながっている安心感、今の自分に意義があるという確証感、何者かが自分を助けてくれているという信頼感、そういったものが、アルベド侵入の場面には常にある。

それはアルベド侵入の後期ともなれば、ほとんど日々の仕事時間すべてで感じられることになっているだろう。主体の仕事時間、活動時間は幸せにスッポリと包まれている。

ところが、最高最大のアルベド侵入（＝アルベド自体）が訪れる、その瞬間――きっかけは人それぞれ違うだろうが――これまでとは逆に、主体はとてつもない不安感に襲われることになる。

すなわち、それまでアルベド侵入が与えてくれていた「安心感、確証感、信頼感」の一切が、主体から、はぎとられるのだ。

その前触れのない絶対的不幸は、ほとんど気の毒なほどだが、しかしながら、これは、彼が"純粋な一点"になるためには、どうしても必要な過程である。これはまさに宗教的な儀式であり、人為的でない、天が導く絶対的なイニシエーションなのだ。

主体はそのとき、寂しさに歯噛みし、虚しさに打ち震え、罪の意識に涙する。彼のそばには誰もおらず、彼の手には何も残されておらず、彼の存在は限りなく心許ないものとなっている。

「私はちっぽけだ。私は何も持っておらず、何をすることも出来ない」

これが憐れなる主体の嘆きであり、心からの痛切な叫びである。

自分の無力さが痛切に迫ってきて、もはや心も体も身動きが出来ない。路傍に捨てられた子供のように動けない。いや、それどころか、子宮から引き出された胎児のように動けない。このままでは命さえ失ってしまいそうだ。

これがニグレドの状態であり、丸裸になった根源苦の表れである。

狭き門を、子供のように

主体は極限まで矮小化し、いまや「子宮の中でしか息をつけない胎児」のようなまでに退行してしまっただ。アルベド侵入の後期を生きていた時の偉大性など微塵もない。

しかし、このニグレドの状態が、アルベドを引き寄せせる。

「命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか（マタイ）」

「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない（ルカ）」

そう言ったイエスの言葉が、いま成就する。今の主体こそは、矮小な胎児のように小さな存在であり、ゆえに子供のように神の国を受け入れる人であり、どんな狭い門や道であっても通れる、命に通じる人だからである。

ニグレドがアルベドを引き寄せせる

すなわちこうだ。――混在的の者のシンメトリー座標である――アルベドは女性原理の現れであり、それは母性原理の表れと言い換えてもよいものである。

そして、母性本能を惹きつけるものは、いつだって「頼りなく涙を流している存在」「母が守ってやらなければ傷ついてしまう弱い存在」なのだ。

つまりニグレドに陥っている主体は、母性の権化であるアルベドにとって「引き寄せられずにはいられない魅力を持つ者」となっているのである。しかも、それまでの「アルベド侵入」の過程によって、主体とアルベド（子と母）の間には、互いを見誤らずに求めあうだけの絆が築かれている。

片や、守られずには存立できない主体。片や、守ってあげずにはいられないアルベド。ここに両者の利益が一致する。

まるで迷子になって泣いている我が子を探すかのように、アルベドは主体のもとに近づいていく。子供を見つけたアルベドは、しゃがんで、その子を抱き寄せせる。

主体の頬がアルベドの胸とお腹に触れたと思いきや、主体はアルベドのお腹の中へと通過してしまう。気づけば、主体は胎児の姿で、アルベドの子宮の中を漂っている。両者は一心同体で

あり、こうなれば二人が離れ離れになることは、もうないだろう――

もちろん、これはイメージ的なものを語っているのだが、実際の体験には、このようなドラマが、一秒に満たない時間でとり行われる。だから私としては、イメージ的に伝える以外、それを描写する手立てがないのである。

余剰分を削る黒

もう一つイメージを提供するとすれば、それは鍵と鍵穴の比喩が相応しい。

恩寵の場面におけるニグレド、黒化は、主体を一つの鍵にする。そして、その鍵が、アルベドの鍵穴に突き刺さる。

それまでの主体がまとっていた「アルベド侵入に伴う幸福感」は、鍵のまわりに付着した「鍵を太くする何か」であり、これがあるかぎり、厚みを増してしまった鍵は、どうしても鍵穴に入らない。

だから、この恩寵の瞬間には、鍵は延長分、余剰分の何かを、すべて削ぎ落とさなければならぬ。これが「黒くなる（黒化）」ということである。黒という色に拮抗はないからだ。そうして、鍵本来の形状となって、アルベドの鍵穴に突き刺さる訳である。

恩寵という合一の形

根源苦に苛まれている主体にとって、アルベドの接近と、アルベドとの合一とは、まさに恩寵である。天から与えられた恵みである。自分から掴んだものではなく、高いところにある、大きなものから零れてきた慈しみである。

だから私は、アルベドと主体が合一するさいに働く摂理を「恩寵の原理」と呼ぶ。恩寵とは、まさに神からの恵みのことである。

もちろんアルベド侵入もまた、一種の恩寵（カリスマ）ではあるが――主体が矮小化しているぶん――感じる恩恵の総量を比べれば、アルベド自体がもたらす「恩寵の原理」のほうが圧倒的に大きく、それゆえ、より恩寵的であると言えるだろう。

かかる恩寵の原理によって、主体はアルベドと合一する。

もし主体に、彼なりに独り立ちできるだけの強さがあったとしたら、主体とアルベドは――その規模と力に、大きな相違があったとしても――一応の並置関係を取ることが出来るだろう。主体は主体、アルベドはアルベドとして、別々に並び立つことが出来る。そうになると両者の合一は起こらないし、起こる必要性もない。

しかし、主体が根源苦を想起することによって、ほとんど"苦しみそのもの"となり、アルベドが、自身の倫理的本質である"救済"を発現させたならば、両者は引き付けられて、一つのものとなる。

また主体が、独り立ちなど到底不可能な精神的胎児となり、アルベドが母性本能の権化となるならば、両者は精神的な「子宮内の胎児」「母体内の胎児」として一者化する。

かくして、神秘体験者（アルベド体験者）たちが言うところの「合一」が起こる。

合一した主体が見るもの

アルベドと合一した主体は、いまや自分の心に光が流れ込んで、想像もつかないような意識の拡大が起こっていることに気づく。彼はアルベドと合一することによって、アルベドの膨大な情報の所有者となるのだ。

もう、寂しさも、虚しさも、心許なさも、一切ない。

救われているから、という表現では足りない。彼はすでにアルベドだからである。彼は救済されていて、かつ救済者の側でもあるのだ。

では、彼は一体そこで何を見るのか？ 何を知るのか？ 何を感じるのか？

それについては『ヘルメスの杖』の下巻にあたる「大錬金術」で語ることにしよう。たしかに恩寵の場面とアルベドは連結しているが、アルベドの内容は、相対性を超えて絶対性を獲得している。大錬金術とは、まさに絶対的な世界の出来事なのである。

したがって、相対的（二元的）な世界の出来事である「小錬金術」とは、分けて考えなければならないだろう。

正統派教義の中核

エピローグとして語りたい。

前節で「恩寵の原理」について考察したが、この「恩寵の原理」は、キリスト教正統教義の中核である。パウロ、アウグスティヌス、ルターという、いわばキリスト教の屋台骨を担った人たちは「恩寵の原理」こそが、キリスト教の本質であると考えたのだ。

彼らの教えは、一般に「信仰義認」と呼ばれている。これは、行いにおいては無力な人間が、ただ信仰によって、神の前に"正しい者"と認められる、という内容だ。

そこでは、人間の"無力さ"や"罪の意識"が強調されていて、私たちは結局、小さくて悪いものでしかないという結論が与えられる。

だからこそ残されているのは、イエスからの許しを"信じる"ことだけなのだが、彼らは「それでよい」のだと言う。それが「義認」ということだ。

なぜなら、私たちが、自分の無力さや、罪の意識を認めれば、それにより、ただちに、イエスからの"救済"に与れるからだ。

たしかに、教える側がアルベド体験者（＝神秘体験者）であり、実際に「恩寵の原理」によって、アルベドと合一した経歴を持っていたならば、このような教義が生じるのは自然であろう。なにしろ彼らは、現実的に「根源苦を想起することによって、アルベドの母性的救済を引き寄せた」のだから。

それに、アルベドまでの体験しか知らないならば、恩寵の場面以上に重要な宗教的シーンは存在しない。だから、パウロ、アウグスティヌス、ルターにとって、それは、宝石のように貴重で、あらゆる人に味わってもらいたい、魂の最高の喜びだったのだ。

だから彼らは「恩寵の原理」を教義化することによって、信者すべてに、貴重な体験の窓口を開いてやろうとした。

それは思いやりであり、間違いなく善意であった。彼らは善意によって"無力さ"や"罪の意識"をクリスチャンに刷り込もうとしたのである。それも当然のことだろう。まずは根源苦を想起しないことには、恩寵の原理は発動しないのだから。

苦しみとは一つの真理

しかし、この『小錬金術』を読んでいただければ分かるように、根源苦を感じるためには、どうしても自我の確立が必要なのである。

仏教に「苦諦」という言葉があるが、これは要するに「苦しみという真理」という意味である。そして、その言葉の心は、「本物の苦しみを知るということは、それ自体が真理としての価値を持っている」ということなのである。

きわめてキルケゴール的な話だが、教育の段階にある者は、苦しみに"快樂による忘却"というヴェールを覆いかぶせて、それにより"苦しみを誤魔化しながら生きる日々"を送っている（美的実存）からだ。

だから――かの三人（パウロ、アウグスティヌス、ルター）が実際にやっていることではあるが――教育の段階にある者たちに根源苦を説いたとしても、彼らは到底、それを"本当の意味合い"では理解できない。その苦しみの重さに耐えられない。目を背けずにはいられない。

もし仮に、その教えを受け入れたとしても、その受容の効能は、せいぜい彼らの心を、暗く鬱屈としたものに変えることぐらいだろう。

それは彼らの人生にとって、プラスの要因であるよりは、よほどマイナス要因となるに違いない。率直に言って、単に性格が暗くなるだけだからである。人生を真剣に生きてはいないのに、やたらナヨナヨと深刻ぶっている人間像が、そこに生まれる。ニーチェが批判した、病的なキリスト教的デカタンズだ。

ある特殊場面の真理を、全体の真理にするということ

根源苦がプラスの働きをするのは、まさに「恩寵の場面」に限られている。しかも、恩寵の場面に辿り着くまでには、混在的一者、教育の段階、自我の確立、アルベド侵入、という長大な過程が必要なのである。これについて本文では、私はこれまで（＝座標8,9に到るまで）ニグレド（黒化）については言及しなかった。

それは、ニグレドがその本質と本領を現わすのが、まさに、この座標8,9の「恩寵の原理」であって、それ以外の場面においては、たとえニグレドの暗い相が現れても、何のプラスの役割も果たさないからなのである。

という形で述べている。ニグレドとは、まさしく"無力さ"と"罪の意識"を噛みしめている状態である。

パウロ、アウグスティヌス、ルターがしたことは、この「長大な過程、長大な前提期間」を全てすっ飛ばして、いきなり「恩恵の原理」のメカニズムを説いたということだ。換言すれば、座標8, 9だけにスポットライトを当てて、その"ある一つの座標の真理"を、"キリスト教全体の真理"として敷衍してしまった、ということである。

ある特殊場面の真理を、全体の真理にする——そんなことをすれば、当然のこと、宗教としてのバランスは、大きく歪まざるを得ない。

なにしろ、恩寵の原理が日常の場面にまで敷衍されたら、私たちは、生まれたその時から「罪の子」にならなければならないのだ。つまり、恩寵に恵まれないかぎり、日々"自分の無力さを噛みしめながら"暮らしていかなければならなくなるのである。これは、ちょっと堪らないものがないだろうか。

しかし、それは確かにクリスチャンの現状とも言える。クリスチャンは現実「お前は罪の子なのだ。人は無力なのだ」と教えられながら暮らしているのである。

それだけでも酷いが、ことに遺伝によって生じるという「原罪」などは、「どうも、適当な"罪"が信者の近くに見当たらない。仕方がないから、遠くからでもいいから罪を見つけ出して、それを無理やり、信者に当てはめることにしよう」と言って探し出してきた罪のようにさえ見える。

つねに罪のもとにある無力なる自分——恩寵によって補償されるわけでもないのに、未熟な心（教育の段階にある人たちの心）がこのような自己認識を強要されるというのは、一種の精神的暴力ではあるまいか。

下部構造の隠匿

パウロや、アウグスティヌスや、ルターは、立派な人たちだった。

ユダヤ教の律法（パウロ）やマニ教（アウグスティヌス）、法律や哲学（ルター）の勉強を通して自我を形成した彼ら——。キリスト教に目覚めてからは、聖霊の導き（アルベド侵入）によって活躍し、ついに恩寵の段階にまで達した彼らを、どうして立派な人たちだと言わずにいられるだろう。

そう、パウロや、アウグスティヌスや、ルターは、恩寵の原理によってアルベドに達し、そこで魂の救済に与れたほど、立派な人たちだったのだ。

そしてまた、彼らは謙虚な人たちだった。自分たちが、「努力して、梯子を登ってきたからこそ恩寵の段階に達しえたのだ」ということを、失念してしまえるほどにも。

そして彼らは謙虚すぎた。自分たちが昇ってきた梯子を蹴って捨ててしまうほどにも。つまり、まるで「梯子を登る努力などには意義がない」という印象を、彼らの教えを聴く人たちに与えてしまうほどにも。

つまり彼らは「恩寵の原理」だけを残して、その前提期間である「混在的一者、教育の段階、自我の確立、アルベド侵入」という"ヘルメスの杖の下部構造"を、すっかり隠匿してしまったのである。無意識のうちに、その謙虚さのゆえに。

ゲーテの『ファウスト』のラストシーンなども、やはり「恩寵の原理」の発露であり、そこでは、老人であったはずのファウストの魂が、しだいに幼児化、無力化してゆく。そして、その変容に応じるように「永遠に女性的なるもの（精神の母性）」が、ファウストの魂を、天上に引き上げて救済するのである。

ただし『ファウスト』の場合には、この恩寵の場面が現れる前に、ファウストの人生にさまざまな紆余曲折があるのであり――ヘルメスの杖を登っているという的確さはなくとも――読者にとっては、ある程度「ファウストに恩寵が訪れても不思議はないだろう」と納得することが出来るのだ。

それに対して、パウロ、アウグスティヌス、ルターが教えるのは、まさに「前提なしの恩寵の原理」なのだ。これは非常に大きな違いである。

正統派の過ちからの解放

キリスト教が「↓」に特化した宗教となったのは、一つには「教祖イエスの"人の子となった神"としての人生」があったからである。

しかし、それ以上に大きな理由が、まさに、パウロ、アウグスティヌス、ルターが「恩寵の原理」を、教義全体に敷衍した事にあるのである。なぜなら「罪の意識」と「無力」とを、幼少

期から刷り込まれたクリスチャンたちには、"上から下へと恵まれる救い"を待ち望むしか、道がなくなってしまうからだ。

それが意図的でないこと、悪意によるものでないことは確実である。

だが、それでもパウロ、アウグスティヌス、ルターがしたことは、あまりにも大きくキリスト教を偏向させた。偏向させて、クリスチャンたちの心を、必要以上に暗くさせた。

願わくば、私は、この呪縛からクリスチャンたちを解放したい。

罪の意識や無力さは、未熟な魂にとっては、まだ"徹底的には"教え込まれなくてよいものである。むしろ彼らが重点的に学ぶべきことは、

「君たちは、無力でも罪の子でもない。反対に、君たちの心の底には、神さまと全く同じものがある。だから、努力したぶんだけ、君たちは神さまに近づいていける。そういう力が、確かに君たちの心には備わっているからだ」

という自己肯定の教えである。

これは、もちろんグノーシス的、錬金術的な教えである。キリスト教正統教義のそれとは真っ向から対立した教えである。

しかし、このような異端的な教えが、幼少期にあるクリスチャンの心を、どれほど晴れやかにするか分らない。伸びやかにするか分らない。頭上からのしかかる「無力」「罪の意識」という黒い蓋が取り除かれるのだから、さぞかしスッキリとするに違いない。

そう、いくら異端的だとしても、その異端的な木がむすぶ「木の実」は、たしかに人の心の栄養となる。そして木の価値は、その実によって量られなければならないのだ。そう言ったのは、他でもなくイエス・キリストなのだから。

「木の良し悪しは、その結ぶ実で分かる（マタイ）」

大丈夫、本書の続編となる『大錬金術』では、神と人間のホモ・ウシア（同一本質）が明らかになる。先の"異端的な教え"の発言責任はそこで取れるだろう。

再臨のキリストによる第二福音書 ヘルメスの杖 上

<http://p.booklog.jp/book/114730>

著者：正道

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/seidou1717/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114730>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト